

長田の家三人兄弟の仇討。佐々木盛綱の役。...

【夜松】 俳諧集。春夏秋冬二冊。...

【俳諧】 俳人。國學者。姓。岡西。...

享年七十三。【國傳】 歌道を興兵衛盛定。...

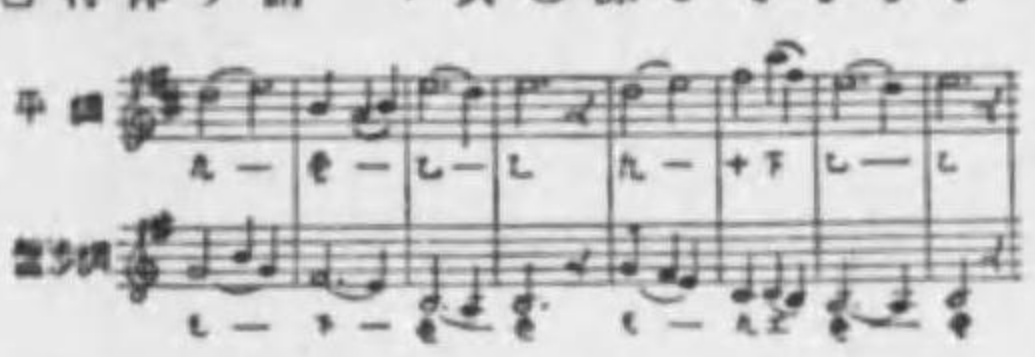
【著者】 俳諧。三都抄。...

【移調】 一つの曲の音階を變へず。...

【律名】 凡。下。變。...

【一語一言】 俳諧一葉集。...

【一口劍】 小説。作者。幸田露伴。...



した日本簡筆大成別巻二冊の所載に従ふこと。...

【市若切腹】 和合歌女舞踏。...

【一茶】 俳人。姓名。小林信之。...

一、漢石。其角兩吟。...

【作者】 休閑東。...

【作者】 休閑東。...

【作者】 休閑東。...

三年再刊は五冊。...

【著者】 鈴木忠侯。...

【著者】 鈴木忠侯。...

【著者】 鈴木忠侯。...

【著者】 鈴木忠侯。...

【著者】 鈴木忠侯。...

【著者】 鈴木忠侯。...

【著者】 鈴木忠侯。...

折柄を尋ねて来た虎若は、夜陰に乗じて娘の代りに源内の持出す物品を取取つて、盛心の萌すのが「破邪神」...

一心二河白道

星からのみでなく、恐らくは本曲にも暗示を得たものであらう。なほ初段、虎若遠目録の條は、「好色一代男」の世之介屋根上からの遠目録の趣向を思はせる。

一節

堀川中納言の孫と判明したので、俄かに少將となされ、後、中納言に登り、翁鑑に孝養を盡した。梓吉の御誓である。

一話

「一話」は、或は青木敦書が「解説」漢語の字義を解説したものであるが、まづ本邦俗間所用の文字にも及んでゐる。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

せられて破門され、兵衛からは打擲にあふ。娘の野飼の古狸が山から逃げて来て、兵衛をだまして鐘を奪ひ、更に娘への離縁状を書かす。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

千葉嘉六、千中の孫と傳ふ。吉原の男藝者であつたが、寛政四年、五代一中を名乗り、初代菅野序進と共に一中節を再興。従来の曲節を一變し、新曲を多く作つた。文政五年十月五日、六十三歳で病歿。法名、一信院理淨日中居士。墓所、本所小梅常泉寺。(六代)千中、藝名、五代門下。通稱、大野高太。天保五年三

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。



千葉嘉六、千中の孫と傳ふ。吉原の男藝者であつたが、寛政四年、五代一中を名乗り、初代菅野序進と共に一中節を再興。従来の曲節を一變し、新曲を多く作つた。文政五年十月五日、六十三歳で病歿。法名、一信院理淨日中居士。墓所、本所小梅常泉寺。(六代)千中、藝名、五代門下。通稱、大野高太。天保五年三

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

一節

流都太夫一節の名に由来する「流都」初代一節が一流を成して、元禄、寶永の頃主として上方に行はれた。操舞の出舞は極めて少く、専ら座敷と歌舞伎とに動めた。

びに行かうと誘ひに来たが、ひどく酔つてゐることとて、くどく同じ言葉を繰り返す。つれにこまらする酒癖。煮賣屋の店からひどく酔つて連の肩にかゝつて漸く出た男が、しつかりしてゐると言ひながら、そして、手前が倒したなどと言ひがかりをする。或は頭が三つになつて見えるなどと言ひを巻く。...

ひ、一筆庵可候と洒落たものである。蓋し、その頃の手紙の一筆しめしめならせ候に始まり、候々候に結ぶことによつたのであらう。...

がない。この點は、魂膽を補綴し、一善悪道中記「魂胆」を見ても背かれる。なほ彼は動機主義を以て大衆的な意義を持たせようとしてゐる。...

【解説】短篇であるが、恰も早稲田文學が「自然主義」を發行し、自然主義の作品のみを掲げた中の一篇である。...

【一筆庵可候】「一筆庵」は、浮世傳師・滑澤本作者、草雙紙作者の「姓名」。...

けた。一編の弟子他上人説教、師の宗風を傳へて初め時宗と云ひ、後に時宗と云つた。...

傳へられるが、年代としては古光の方が合致する。...



(高寺光壽)傳上人上人

いが、正しく當代の名手として推すに足る。その筆は瀟灑にして、人物の集合状態を描いて巧みである。...

【一筆庵可候】「一筆庵」は、浮世傳師・滑澤本作者、草雙紙作者の「姓名」。...

【一筆庵可候】「一筆庵」は、浮世傳師・滑澤本作者、草雙紙作者の「姓名」。...

響され、門下より一睡亭海堂花、一浪亭魚鱒等を出した。また古狂歌集を編輯するなど、斯道に専らとらふ少くなかつた。

花のつと、安永五年刊『狂歌五題集』(同九年刊)、『狂歌五題集』(同九年刊)。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

【由来】支那でも提提備といつて、この種の操縦が行はれたが、日本の操縦は、寛文の頃から大阪道頓堀の伊藤出羽屋・石井成福屋で見せた。京の山本角太夫屋でも、寛文・延宝の頃から見せた。

【好色由来】の四の巻によると、操縦の名人が見えるから、これ等の名人が山本角太夫の浮世囃子によつて、操縦を造つたのであらう。

に、近來絶えたるものとして南宮操を挙げ、そののを見る、山本備三五郎の操縦は寛文・延寶から、實験の頃まで榮えたものと観てよい。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

【由来】支那でも提提備といつて、この種の操縦が行はれたが、日本の操縦は、寛文の頃から大阪道頓堀の伊藤出羽屋・石井成福屋で見せた。

【好色由来】の四の巻によると、操縦の名人が見えるから、これ等の名人が山本角太夫の浮世囃子によつて、操縦を造つたのであらう。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。



伊藤左千夫の肖像

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

【俗名】小人形の動作を、吊した紐で上から操る。遊び手が人形よりも上にある。吊した操縦者の人形の紐を弄きながら操るのが、その特質である。

又「つくも愛の物語」は、物語をする老女が、つら

に物語る體である。老女は今春春日野のわたりに住んで居るが、もと

【参考】今讀註... 今讀註... 今讀註...

明治二十九年關根氏の校定本刊行、更に同三十年荻野・松井、關根三氏の校定四續二に收載

【今讀註】今讀註... 今讀註... 今讀註...

「女今川」もまた今川狀に摸して作られたものである。

【今川了俊】今川了俊八十二歳の時、當時百姓となつてゐた青砥藤原の子青砥五郎藤原次

【今讀註】今讀註... 今讀註... 今讀註...

館に描かれた妖怪出現の事などを取合せ、結局悪人退治といふ仕組である。

治は下人等を連れて、おすま等の家に踏み込み、中村と共に三人の女を縛り上げて引上る。

今源氏六十帖

今源氏六十帖(今源氏と略) 脚本 三幕六場 王代物(名物) 今源氏と略される主人公の名を掲げて、當世の「源氏物語」と見たてたに據る。「作者」近松門左衛門「発行」元禄八年正月、京都萬太夫芝居「替り狂言」(發刊)住の江尾之介(大和屋武兵衛、註明松(水本屋之助)、若竹(水本屋之介、釋舟共論、いろは、書庫大江之介、小野川雪次、相持代之介、教田十郎)等。

【緒言】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

今源氏六十帖

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

【結末】當年出版の輸入狂言本が保存する外、源氏物語狂言集上巻に所収。【題材】名題の通り「源氏物語」を今様にした脚色であるが、直接の交渉は少なく、迹に辰之助の猿の所作を入れる爲めに破倫の態を描くとか、同時に幾組かの戀を挿入する爲めに、「源氏物語」を背景にしたのかと思ふ。

いましめ

いましめ

におまんを自分の妻にくれるといふ。次右衛門門夫は、事の意外に驚いたものの、二人にとつて源五兵衛は思入の子息である。義理に備へておまんを説伏しようとするが、勿論おまんは黙かない。(其二)同裏手二階敷。おまんは覺悟して、墓にする白木桶を使つて二階から下へ降り、支へる手代の茂三郎をふり切つて三五兵衛の許へ急ぐ。(其三)行人坂下目黒船屋。富士屋の隠居所の兼先に、三五兵衛は物思ひに沈んでゐる。そこへおまんが駆けこんで来る。事情を知つた三五兵衛は憤つて源五兵衛の所へ出向かうとする時、源五兵衛が入つて来る。言争ひの末、源五兵衛は三五兵衛に罵られて白刃を抜く。烈しい立廻りの後、三五兵衛は得物を落され、うしろの川に落ちて溺命する。おまんは三五兵衛の落した脇差を拾つて自害し、人の心が刀で斬れるか、力で見られるかと最後の言葉を残して死ぬ。これを見て源五兵衛も、おまんの精神の袖に刀を巻いて涙を流す。

【解説】作としては、その緊密な運び、簡潔な会話、たとへば草履一足の存在をさへ決して苟くもしない底の周到な用意の上に、個々にこの作の生命はかゝつてゐる。しかもそれらの間を縫つて流れるこの作者獨特の豊かな詩情は觀者を魅了しなければならぬ。同時にこの作は左衛門次のために書下したのだとはいへ、左衛門次の柄なり特質なりはつきり描んでこれを生かすのに全く成功した。左衛門次の當り役の一つである。殊に序幕の新しい出語りで、無骨一編の薩摩武士が不覺な態に傾みそめる様は、新しい歌舞伎俳優としての彼の眞價を遺憾なく語るものとして賞讃された。又それを助ける市川寛次郎の中間助が

比類なき出来栄を示した。(久保田)

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。

今様二十四孝(松風)を見よ。



【挿絵】今川義元の子孫、遠州濱松の城主朝比奈義興の子鶴江之助は、山陽三次郎大谷大之進を伴ひ、駿府在勤中、遊女奥州の色に迷ひ、大之進と語り大金を取寄せ、これを身請しようとした。三次郎は諷めたが用ひられぬので、遂に奥州を殺害し、鶴江之助の連歌の師宗長法師に調へられて妻を離した。また大之進は朝比奈宗家より送進の金子五百兩を奪ひ、山城上田村に到つて百姓となる。連歌師宗慶の子平六を買つて姉妹おたるの契とし、妹娘千代は、大阪道修町伏見屋太兵衛方に嫁がせた。併し千代は後で三次郎と許婚の仲であつたので、嫁して後も貞節を守り、やがて太兵衛の破産後、富貴川崎屋源兵衛に嫁したが、事情を明かして志を更へず、偶々三次郎が油掛町の八百屋伊右衛門の手代半兵衛となつてゐるのに會し、源兵衛の理解を得てその最後遂に半兵衛の許に歸つた。一方三次郎は恨んで死んだ奥州は亡霊となつて、三次郎の父三左衛門の許に現はれ、間もなく三左衛門は鴨

江之助大之進に謀殺されて、義元秘蔵の千鳥の香爐を奪はれた。これより先、半兵衛は國許の事を案じて、密かに大阪を立つたが、その留守中千代は、伊右衛門の妻阿熊が男太兵衛を入れんとする悪計に陥ちて家を追い、上田村の父の許に歸り、同村の富家金藏に嫁し、嘗て金藏が大之進から買つた香爐を奪つたが、それは偽造のものであつた。併し半兵衛は、遂に大之進を合葬ヶ辻に討取つて千鳥の香爐を取返し、義元の怒りも解けて、半兵衛は千代と共に歸國、功に依つて莫大の加増あり、父の名跡を繼いで榮えた。後、金藏は來迎寺にお千代、半兵衛の碑を立て、また奥州の靈は、宗長が奥州の宗慶を訪ねんとする途中、鳴海の釜で教化されて佛果を得たといふ。

【構想】遊女奥州、寶物の香爐をめぐる忠臣孝子の復讐物語で、既に海音の「心中二重巻」、近松の「宵度申(各編)」や歌舞伎に仕組まれて名高い三つの演の宵度申の心中物語を思はせる作中の人名や題名を擧げて、却つて讀本の趣向構想によつた奇異の物語を織り込み、動盪懸念のものとした所に、一篇の作意がある。巻首に十返舎一九の序がある。(佐野)

【挿絵】(初段)大内、大内の段)太宰少貳國人の後進定香が、娘鶴島に愛を注いで、病相續を顧つて退出する。大臣娘の召で、病氣引籠中の鶴島が參内すると、入鹿は證據の品を示して、謀叛の疑があるからと證據を命ずる。(中、春日野小松原の段)大内清澄の子久我之助と鶴島とが、吹矢の筒を隠して濡れぬ。そのあと、鶴島の女中が宮中を説きに来る。久我之助が巧に落す。(切、蝦夷島の段)父娘の無道な魂をい入定中品を大内清澄に渡して、蝦夷に語つて切腹せ、愈々假面を脱いで天下を這はるとの決心を明

【挿絵】(二段)口、猿澤池の段)御醫愛の采女が投身したといふ猿澤池畔の柳樹の下に、帝行幸の際、入鹿が御所に亂入して大騒動との急使に、鶴島の子浪海の機嫌で、帝の御日の不自由なのを幸ひに、還朝と言上して愛撫。

流す。せめて相手だけは助けたいとの心底からであつたと分つて、川を隔てて共に大悲歌に...

遊説入鹿計謀の思案責任官の沖次それ、あつて、清澄、鶴島の道徳が大開演。【構想】超人間的の力を有する悪の権化、入鹿...

年に出演し、同六年十二月再興したが兎角振はずに又々座座の運命に迫られた時、半二が...

なつた。ところが彼は南條家で働かれた新年會に偶然お辻と再会した。彼女の母は昔で南條家の乳母であつたので、いはゞ二人は乳姉妹であつた。...

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

【伊良都女】成美社から創刊した婦人雑誌である。百巻前後まで続いたが、文學的内容の見るべきものは、五十巻くらゐまでであつた。

天祿水鏡の頃の有様を代表してゐる事からして、いろは歌を天祿乃至水鏡前後の作とし、その作者については、民間化導の爲め大乗教の教徒の作つたものと推定した。この説は、いろは歌が、古くから行はれたあめつちの代つて假名手本となるに至つたのが、平安朝半過ぎから院政時代初期までの間に在つたらしい事、天祿年間には源盛が作つた「口遊」に、あめつちの代りに用ひるがよ、とて「たんにいで云々」の四十七音の多音節歌を載せた事(當時いろはの行はれた形跡はない)、「江談」に源盛がいろは歌を讀んだといふ傳説が見える事などと合考へて、大體に於いて當を得たものと思はれる。但し、作者に關する説はなほ考へる餘地があらう。【典拠】覺禪の「伊呂波釋」以後、みな源盛の四句の偶「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂」の意を取つたものと解せられてゐる。但し、最近これを疑ふものもある。

【京の字】いろはの終りに「京」の字を添へたものは、今日では「京音韻略」の「京」の字、京十年巻に見えるものが最も古く、それより「伊呂波音韻略」(嘉永二年)、「高野日記」以下に續いて見え、近世では、これをつけるのが普通になつた。何故に「京」をつけたかの問題については、或は梵字の字母の終りに、Ihna, ka の如き二合字(文字を二併せて一字としたもの)のあるに倣つたと云ひ、或は揚音を示す爲めと云ひ、或は假名手本の終りに、京の大略小路の名を著した爲めであると云ふが、何れも確證なく、未だ解決することが出来ない。

【参考】音韻及手習詞歌考 大森通 ○日本歌謡

史高野原之 ○假字本末 伊呂波字

考録 全五

三年の典書がある(但し、文明の頃までに増補したものの六冊)。この書は「色葉字類抄」と大同小異で、「色葉字類抄」の前身と推定される。又前用文字と題する書(常呂二軍兵部)がある。常本であつて、「色葉字類抄」に近似してゐるが、三巻本より古いものから出たもので、増補せられたものらしい。

後に出来た節用集(節用)を初め、本書の組織を換した辭書は少なくない。次にことばを主とし訓又は音を出して居るから、平安時代の國語及び漢字のよみ方を研究するには、缺くべからざる重要な資料である。又十巻本は、「日本書紀」(延喜式)「弘仁格」(百韻格)等の古書を引用して居るが、その中には本朝事始「本朝文選」の如き、今は既に散佚した古書が引用せられて居るのは、注意すべき事である。

【参考】色葉字類抄 政略 山田孝雄

【参考】いろは新助 山田孝雄

【伊呂波字類抄】いろは 語學書 辭書 【名稱】二巻本・三巻本には「色葉字類」とあり(著者)「佛書家」成立。天養から治承まで三十餘年を費して成る。【諸本】二巻本・三巻本・十巻本の三種がある。(一)二巻本、三巻本の稿本とも見られ、最も古い形を傳へるもので、長寛の頃に出来た。永祿八年の寫本が前田侯爵家に存する四冊になつて居るので、俗に四巻本と云ふ。(三巻本)三巻本は、二巻本を著者が増補したもので、治承の頃に成り、三巻本の傳本中最も重要なものである。傳本が二種ある。(一)前田侯爵家所藏、著者の時代に甚だ近い頃の寫本で、傳本中最古のものである。但し中巻がなく、下巻に十四葉の脱落がある。(二)巻かないので、従来二巻本と誤られて居た。而して本書は最古の寫本とは云へ、脱脱必ずしも少くないものである。既に複製刊行せられた。(二)黒川清道氏の藏本で、後世の寫本ではあるが、三巻本に居る。これも脱脱は少なくないが、前田本の足らない所を補ふには唯一の資料である(古書保存會で複製刊行した)。(十巻本)鎌倉時代に増補重訂された云々したもので、その増補は頗る多く、内容は最も豊富である。徳川の初期今井仙石が學界に紹介して、流布したもので、従来學者が「伊呂波字類抄」と云つて引用して居るのは、大抵この十巻本である。(山田孝雄氏が校合し、正宗敦夫氏が影寫版に附して刊行した。日本古典全集第三本に收載)【題名】以上の外に「世帯字類抄」と題する書がある。水戸の彰考館の藏本は永正年間(寫本三冊)。前田侯爵家藏本は建保

【参考】音韻及手習詞歌考 大森通 ○日本歌謡

嵐崎寛も勤めてゐるが、實川經三郎が得意として筆を勤め、現實川經三郎に傳へられてゐる。但し節用に添削を重ねたもの。又通行も一様でなく上流毎に變つてゐる。「蘇」に客塵の懸「酒」(文政二年七月大阪角の芝居)「道行浮名」(春南)(弘化三年九月大阪中野芝居)「浮名立野邊」(嘉永六年九月大阪竹田芝居)等。江戸では



享和元年二月、市村座「御花街御茶屋」第二番目に、奈河七三助が江戸の世界に書直して「いろは新助」と名題を掲げて上演したのが初めである。いろは(三代福川重三)・新助(三代市川八百藏)等。更に文化七年二月森田座で、同じく七三助によつてお花半七に改作される等、ともかくこの系統が種々に改

作されて、明治まで傳はつた。

【挿話】新助は太刀屋の婿であるが、鳥の内くつわの傾城は新助の深い馴染であつた。新助は主人の重三郎が御家の重寶である仁王三郎の刀とその折紙とを盗まれたので、詮議をしてゐるが、その持主が同じくいろはに懸念してゐる合法小平太である事がわかる。又この重寶を手伝兵衛が盗んで居るといふ事をしてゐる。小平太に請ふ角力千足勝右衛門は、重寶二品と引換に小平太が意に従へといはるにも新助にも説く。兄弟分の約をした初花傳七は新助に加勢をして重寶も手に入れ、いろはの望みも遂げさせようといふ。然し、新助には金子も思ふやうにならず、執心の小平太はいろはを頼に渡さうとしない。その中、主人重三郎は殿の上意で重寶の二品の入用が急になる。そのいきさつを察したいろはは、新助とその主人との危念を考へて、小平太に身を任せて重寶を手に入れようとしてゐる。新助に愛想づかしをする。それを本當と信じた新助は遂にいろはを斬るが、斬つた刀は刃引でいろはは死なず、重寶の刀は傳七が手に入れ、折紙は新助が勝右衛門に兵衛を殺して手に入れる。これで主人重三郎の歸參は叶つたが、新助は人殺ゆゑにいろはと共に心中(通じ)しようとする。ところが小平太は六兵衛のために捕へられ、新助は重寶を手に入れ功によつて罪にならず、いろはは共々死なすにすむ。

【挿話】新助は太刀屋の婿であるが、鳥の内くつわの傾城は新助の深い馴染であつた。新助は主人の重三郎が御家の重寶である仁王三郎の刀とその折紙とを盗まれたので、詮議をしてゐるが、その持主が同じくいろはに懸念してゐる合法小平太である事がわかる。又この重寶を手伝兵衛が盗んで居るといふ事をしてゐる。小平太に請ふ角力千足勝右衛門は、重寶二品と引換に小平太が意に従へといはるにも新助にも説く。兄弟分の約をした初花傳七は新助に加勢をして重寶も手に入れ、いろはの望みも遂げさせようといふ。然し、新助には金子も思ふやうにならず、執心の小平太はいろはを頼に渡さうとしない。その中、主人重三郎は殿の上意で重寶の二品の入用が急になる。そのいきさつを察したいろはは、新助とその主人との危念を考へて、小平太に身を任せて重寶を手に入れようとしてゐる。新助に愛想づかしをする。それを本當と信じた新助は遂にいろはを斬るが、斬つた刀は刃引でいろはは死なず、重寶の刀は傳七が手に入れ、折紙は新助が勝右衛門に兵衛を殺して手に入れる。これで主人重三郎の歸參は叶つたが、新助は人殺ゆゑにいろはと共に心中(通じ)しようとする。ところが小平太は六兵衛のために捕へられ、新助は重寶を手に入れ功によつて罪にならず、いろはは共々死なすにすむ。

【参考】いろは新助 山田孝雄

【参考】いろは新助 山田孝雄

を撰つて開覺寺としてあつたのを堂々と芝草岳寺と明記してあるのかく推測する。『諸本』抄本文庫・赤穂復讐全集(帝國文庫所収)...

かゝり、神狐が元助に化けて、片岡傳五右衛門の眼病を療治した話。(七編)森胡平太長谷の眼病で、茶屋女お民(實は豊谷の家中見十右衛門の遺児)と馴染む話。...

に於て彼の本心が分る話。(十二編)夷助の妻お冬、義士の妻たる名譽に由つて築港する話。お冬、義士の妻たる名譽に由つて築港する話。...

人情本である。正史實傳と題してはあるが、實は講義本を面白可笑しく添けたのである。...

使光昭の跡を追ひ、高砂の浦にて追付き、奇蹟を示して、一行の歸依を得て渡唐する。(青龍山石橋の段)かくて空海は長安の都に到り、青龍王山の祖傳ひで青龍山に分け入り、石橋を渡つて文殊菩薩の影向を拜し、金胎兩部の大法...

の間に金吾の妻は身代りに立つ。然るに判場を通りかゝつたいはの前はの如きと知り、名を取つて互に死を争ふ。金吾の機轉で太刀取を討つて、三人共に虎口を逃れる。(四段)...

瑞晴への過渡的色彩を帯びた作柄となつてゐる。更に部分の二石橋、からの脱化であり、第四段の神谷の里は、説話の『羽衣』の高野山の饗宴と考へられ、第三段の金吾の妻身代りの饗宴は、後の歌舞伎式の場面先驅をなすが如くに思はれる。...

二十八歳後新いろは物語と近松門左衛門補遺に竹本義太夫相勤、今百ヶ年及び、その遺れるを拾ひ再板せしむるものなり」と述べて居るのによつて、一以呂波物語との関係は推測出来る。...

云ひ、次に支那の上代文字、佛書、漢書、諸書等のこと記し、漢字の流來を説き、出雲神門郡神門寺に、弘法大師撰の「いろは」があら

る。萬葉の著者神字日文傳は神字の信すべきものとして十三種、要はしきものとして三十餘種を擧げて考證してゐるが、その中に「詠

げて註釋を加へたものである。【解説】引用書は相當廣く、歌學書では後撰口傳「新撰口傳」

岩井柳桑野仇討のあらはれり。草雙紙合巻、七册、半紙本【作者】山東京傳

殺する。(六) 藤が大和に居ると聞いて七郎、太郎藏の二人は出發しようとする。太郎藏は

幼児が猛悪なる者の虐待に苦しむ趣向、或は幼兒や腰刀を思ふ強烈な母性愛は、京傳の作

死ぬ。常陸守は正妻に子なく、鹿島の女の腹に唯一の大男が有り、關白は今の后で三男

岩清水八幡に祈願して、七日の夜神託がある。關白は姫君を入内させようとする、伊豫守が何

全集第四巻所載

【提議】 奥様の健康を慮めるお相手に、二十の春を迎へた頃は笠原家へ初奉公に上つた。...

御同母の妹で、稚郎子が天皇に皇位を譲る為

め自殺された折、遺言によつて天皇に奉られたいのであるが、それを二十年以上を願つてから...

【作風】 その作品を見ると、皇后と云ふ御身分

を超越して、身も心も懸に傾注した一個の女性の悲しみの聲を聴く思ひがある。それほど...

【作風】 三十五冊【作者】 水原玉藻

玉藻(前掲) 龍花(前掲) 龍花(前掲) 龍花(前掲) 龍花(前掲)...



岩見英雄 著

げた。その頃竹腰幸子と結婚した。同三十一の交、肺を患つて療養のため琵琶湖畔に赴き、...

【作風】 傾向 半戦主義に出発して一元描寫論に終つた彼の活潑な、藤村花袋と並んで日本...

【作風】 傾向 半戦主義に出発して一元描寫論に終つた彼の活潑な、藤村花袋と並んで日本...

【作風】 傾向 半戦主義に出発して一元描寫論に終つた彼の活潑な、藤村花袋と並んで日本...

るもので、實際に於ては同音のものがあつたのである。そこで、唐の許敬宗が奏して、他と通用するものと別用するものとを定めた。これは「廣韻」に見えてゐる。...

「廣韻」が「音韻略」の「音韻」の考へるなど研究は次第に詳しくなつた。併し古語の聲、即ち語頭の子音に至つては、始めて古今の相違に注意するものがなかつたが、錢大昕に至つて、錢、音、南北諸人の反切を「廣韻」と比較し、古は舌上音の知徹澄の三母は舌端音の...

益であると断じてゐる。然るに竹文庫の「唐光韻鏡」...

轉機に臨んだ。全書は韻鏡は音韻の原である...

本の漢吳音の爲めの研究で、純粹な支那字音...

代古音韻」を著し、又漢吳音の研究から、韻鏡を研究して「韻鏡考」を著され、満田新造...



親に話した所、親は驚いて人を頼み、向ひの兩親に言ひ入...

の七條は片假名本に無く、なほ四巻以下六巻...

で、事實としては信憑出来る事ばかりである...

古抄本、原本所在不明、東大國語研究室蔵の源算本...

節の代表文字を、韻鏡の子音の同じものを同じ...

し、満田博士は、一等はu, o, e, a, 二等は...

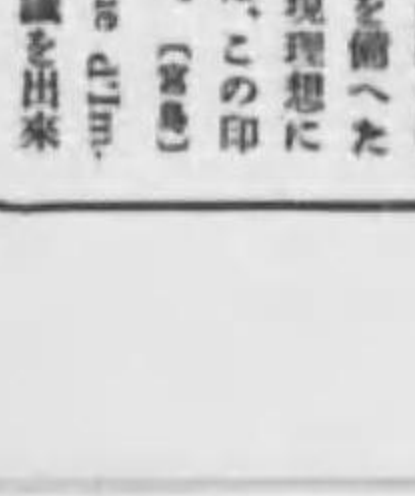
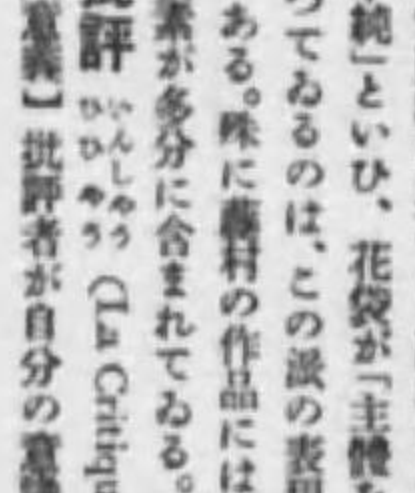
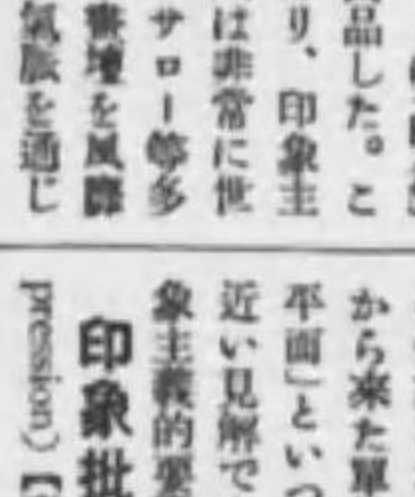
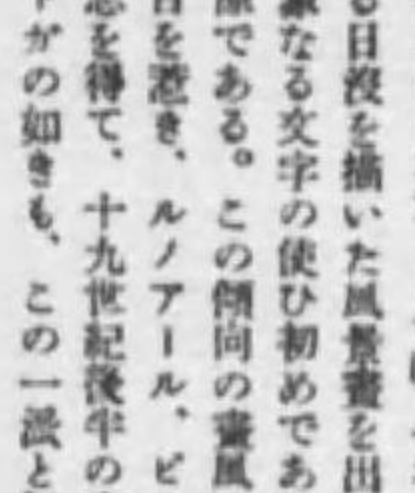
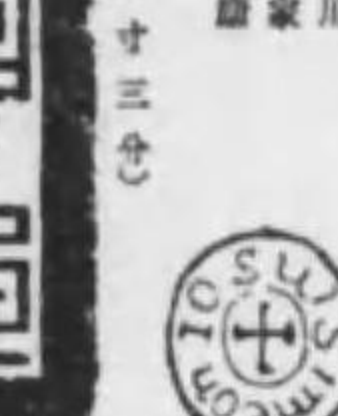
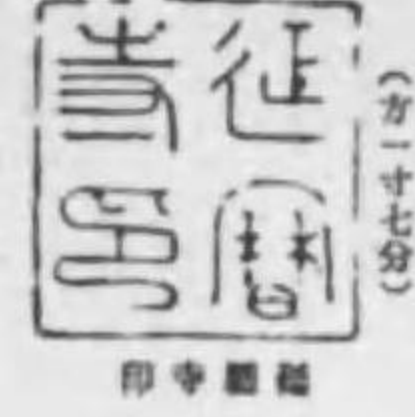
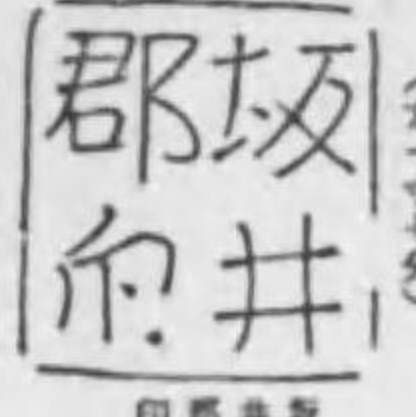
【註釋】應永十一年... 【註釋】應永十一年...

【註釋】自序には、韻鏡の成立・傳來を略記し、韻鏡が晩唐の頃...

ついで一言し、次に韻鏡の原形、及びそれが...

韻鏡の成立の時代、(一)反切製作の時代、(二)二百六韻の性質、(三)等位の解釋、(四)内外轉の別と十六韻目の用等に關する研究...

名とは、打診即ち第一と第三とが並ぶのを禁じてある。後に前後の關係によらないで、五七五の長句に餘ふ字、七七の短句に餘ふ字を制したる字である。...



印が士民の間に發達した。この風は既

に豊饒時代から萌してゐるが、江戸時代

の印を有つてゐた。そして捺印の場合には、

多く黒肉を用ひたものである。その他商家の

封印・蔵書印なども當時盛んに使用され、以て

た。一八八九年にはウィルステンステア、ウ

ルター、シャット、フランドル、ペイト等の

ゴーカーン、ゴーカーン、彼等が後印

に解消するまでは皆印章主義を奉じてゐた。

【文學に於ける印章主義】文學に於ける印章

主義は、主としてゴーカーン兄弟によつて繪

畫上のその主張から取り入れられたもので、

自然主義的傾向が對象そのものを在りの儘に

描かんとして純客觀的態度をとるに反し、こ

れは作者の感らざる限及び氣をこめてその



【印章主義】印章主義 (Impressionism) 繪畫又は文學

に於て、藝術家が自然に思ふに任せて、筆

【印章批評】印章批評 (Critique of Impressions) 批評者が自分の意見を

るだけ平靜にし、何等の先見、偏見等を持たな

【飲食】飲食 (Diet) 飲食の種類の

津守宗次郎 (自六九) 河村實徳 (自一〇)

談話主人著「名譽録」がある。なほ「御菓子

【家庭雜考】家庭雜考 (Domestic Miscellany) 家庭

ういよ山ぶみ 岡本寛長

『成立』既に一生の大事業『古事記傳』を編纂した...

上からの美術

芥子園畫譜(十種)第三〇日本演劇史(伊藤野矢)...

上田敏子

上田敏子(生没)明治七年十月、東京築地に生れ...

【参考】玉露問本(寛長)○本居寛長(村岡眞)



(年元雜覽)し臨みせの賃車外)

ういよ山ぶみ 岡本寛長

『成立』既に一生の大事業『古事記傳』を編纂した...

上からの美術

芥子園畫譜(十種)第三〇日本演劇史(伊藤野矢)...

上田敏子

上田敏子(生没)明治七年十月、東京築地に生れ...

【参考】玉露問本(寛長)○本居寛長(村岡眞)



上田敏子

り、「海潮書」再版本と共に本集の刊行を見るに至つた。以上の缺陥あるが故に上田敏文歌の中だけでは價值が少くない書物であるが、海潮書以後の章に於ける新詩は、ベルトラン散文詩に、シュエブ「小兒十字軍」に、コルビエにラフケルグに、グロムモンにコロオデレに、な

上野の戦争 （一） 上野の戦争 （二） 上野の戦争 （三） 上野の戦争 （四） 上野の戦争 （五） 上野の戦争 （六） 上野の戦争 （七） 上野の戦争 （八） 上野の戦争 （九） 上野の戦争 （十）

植村正久 （一） 植村正久 （二） 植村正久 （三） 植村正久 （四） 植村正久 （五） 植村正久 （六） 植村正久 （七） 植村正久 （八） 植村正久 （九） 植村正久 （十）

つゝ、一家の生活を支へた。同十五年、村州田邊の人、山内季野と結婚した。その後、朝香一孝町教會（今の聖三堂）に轉じた。爾來この教會を救済すること二十四年、日本第一の教會と稱せられるやうになつた。この間三度外遊し、「福音新報」「日本評論」の創刊、東京基督教青年會・東京神學社の創立等、奮勵するところが多かつた。又彼は説教の雄辯を以て天下に鳴り、内容の豊富な、暗示に富んだ力ある説教家として、基督教界に獨歩の地位を占め、文章に於ても一種の風格を具へ、基督教界に於ては勿論、教外に於ても、有数の評論家を以て目された。多忙の爲め、學問に組織を立てるだけの餘暇がなく、且つ囂まつた著書は少ないが、著書の編輯委員として從事した和譯聖書は言ふまでもなく、新聞雜誌等に發表した評論や隨筆等は、殊しいものである。就中、二十三年の創刊に係る「福音新報」は、獨力の經營で、全部の内容に甚深い注意を拂ひ、甚尚の同業もその影響を蒙らなかつた。

魚歌 （一） 魚歌 （二） 魚歌 （三） 魚歌 （四） 魚歌 （五） 魚歌 （六） 魚歌 （七） 魚歌 （八） 魚歌 （九） 魚歌 （十）

魚歌合 （一） 魚歌合 （二） 魚歌合 （三） 魚歌合 （四） 魚歌合 （五） 魚歌合 （六） 魚歌合 （七） 魚歌合 （八） 魚歌合 （九） 魚歌合 （十）

魚歌集 （一） 魚歌集 （二） 魚歌集 （三） 魚歌集 （四） 魚歌集 （五） 魚歌集 （六） 魚歌集 （七） 魚歌集 （八） 魚歌集 （九） 魚歌集 （十）

つたので、「すべて他し國の人は、子産む時に本國の形になりて産むもの故、産屋を覗き給ふ勿れ」と戒めて産屋に連れて行くが、母はその戒を破つて、産が八尋和通に變じた姿を見たので、産が恥ぢ且つ悲つて去らうとした。母が生兒の名を問ふと、産屋の全からざるに因んで、「うかやふきあへずの尊と呼び給へ」と答へ、兒を妹の玉依姫に託し、海産を齎して去つた。【解説】この神話は、（一）海産の實際の女が、所謂「玉依姫」(不詳)として、一個の現現であること、（二）人の子の生出が、水の神の勢能と密接な關係を持つと信ぜられたこと、（三）生兒の命名權が母の掌中に存したこと(古事記にも、彥仁天皇が、凡子名、必母名として、生兒の名を紀伊國の民俗學的價值に富んでゐる。豊玉姫が、子を産む時は本國の形になると云つて、和通に變つたといふ話根も、或は、わたつみ族が和通(これが御・海蛇等のいづれを意味するとしても)をその養子としたこと、及び生兒が母方であるわかつみ族に屬することを示すものであるかも知れぬが、これだけは少し大膽過ぎる假説として保留した方が安全であらう。

宇岐歌 （一） 宇岐歌 （二） 宇岐歌 （三） 宇岐歌 （四） 宇岐歌 （五） 宇岐歌 （六） 宇岐歌 （七） 宇岐歌 （八） 宇岐歌 （九） 宇岐歌 （十）

少女 （一） 少女 （二） 少女 （三） 少女 （四） 少女 （五） 少女 （六） 少女 （七） 少女 （八） 少女 （九） 少女 （十）

薄の跡 （一） 薄の跡 （二） 薄の跡 （三） 薄の跡 （四） 薄の跡 （五） 薄の跡 （六） 薄の跡 （七） 薄の跡 （八） 薄の跡 （九） 薄の跡 （十）

浮雲 （一） 浮雲 （二） 浮雲 （三） 浮雲 （四） 浮雲 （五） 浮雲 （六） 浮雲 （七） 浮雲 （八） 浮雲 （九） 浮雲 （十）

たが、その技は益しく歩歩してゐる。併し洋...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

美といふものを目的とした書画で、爲めに男...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

作家には、初代豊國(前和六年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

を特色とする。

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

代男二回世襲男二色道徳修行男などが出で、こ...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

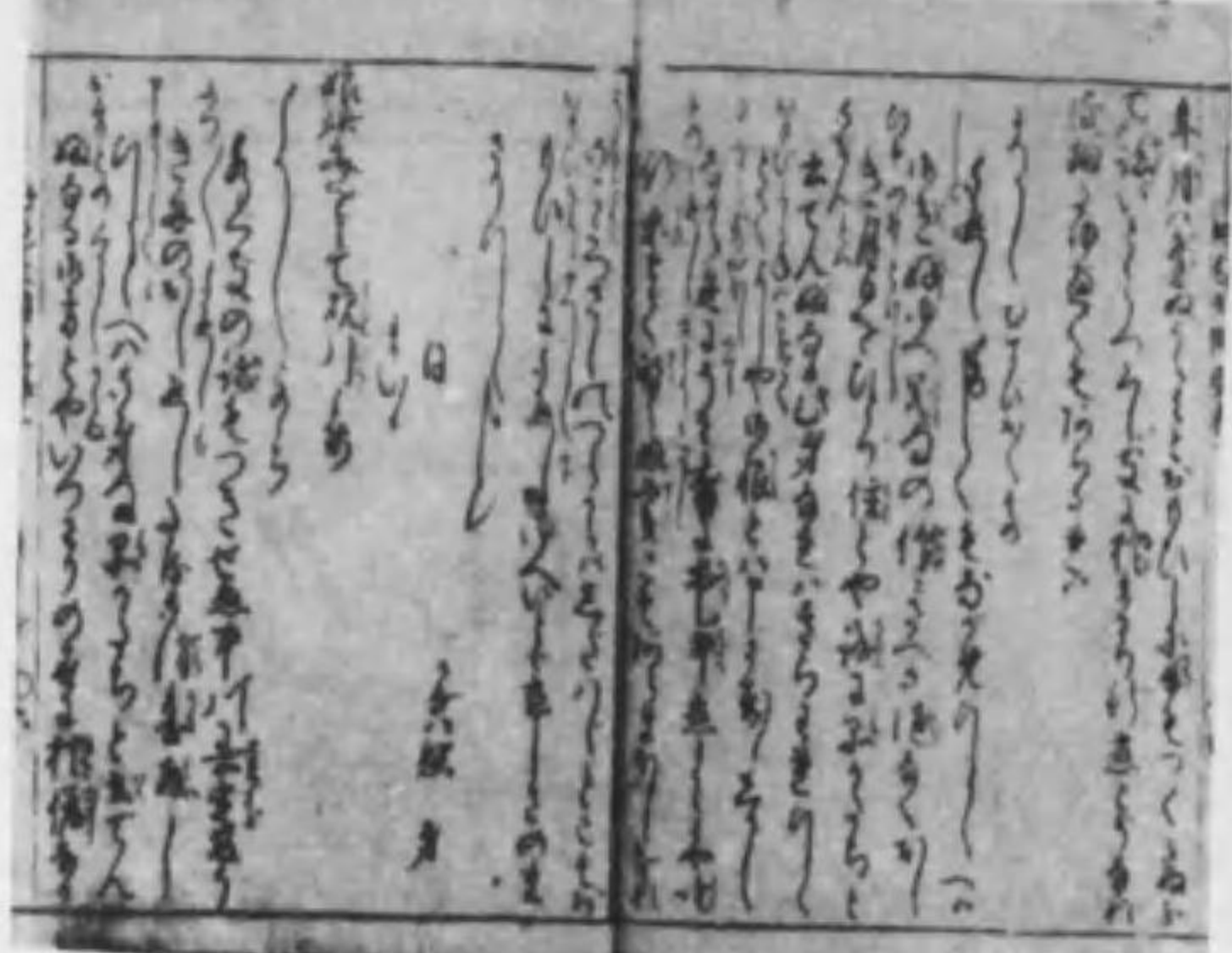
【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

【参考】浮世繪考考巻尾(昭和十一年)...

(一) 子草世浮



授傳文色好



(藍) 女代一色好



(藍) 鳥翼比色男



(藍) 鳥翼比色男



(藍) 合具色好



(藍) 天象調色好

小かんといふ如く、又「心中」は水の朝日」の題名であるが、これには三つの殺人事件、又賣物の紛失など種々な「六枚屏風」で遊ばれたものを一切採り用ひてゐる。何故に種々な同年に同原作から態度を異にした二編案を出したか、考ふべきである。また「六枚屏風」に於て注意すべき他の一點は、これが風に外國に紹介されてゐる事である。弘化四年の地誌、慶應三年の英譯がある。英譯は梗概だけであるが、これは明治二年に再版された。(山口)

浮世柄比翼相妻 浮世のうきよから 脚本 八幕十八場 他家世話物【作者】四代鶴屋南北【名義】比翼は主人公に扮する團十郎菊五郎を表し、相妻は「昔話相妻表紙」を暗示する。「異稱」別名題として、「名古屋帯雲錦妻」「比翼相妻」「比翼相妻」「比翼相妻」名古屋だけ調立した場合、「後時花吉屋」「花無家丹前快活」「昔話相妻」「錦春土佐備前」「比翼相妻」「尾花比翼相妻」

浮世草子 浮世草子 浮世草子 浮世草子

【脚本】大南北全集第三巻、日本戯曲全集第十二巻所収【発行】文政六年三月六日初刊、江戸市村屋初版。
【脚本】古来の不破名士自伝の狂言であるが、直接採ったのは京傳の讀本「昔話相妻表紙」(別項)で、これが京阪で脚色上演されて好評を得たのに刺激されたと思ふ。
【脚本】(東海道築木)不破伴左衛門

は、本庄助八と中間又平に命じて、白井兵左衛門を名古屋山左衛門の兩家老を殺させ、神妙の巻と米國俊の刀を奪つたが、助八はこれを盗んで逃げる。(鎌倉長谷寺)佐々木一家管轄につき、桂之助と頼五郎の義理兩若殿を助けて、伴左衛門と本庄助八、山三と白井權八の争闘で、系圖の一巻は紛失した。三は親の仇討を許され、伴左衛門は遺放となる。(助太夫内藤外)伯父助太夫がお家押領の企てを知り、權八は切り殺して逃走する。(二幕) (川崎大岡河原)見世物館になつた又平の娘お國は、輪巻を惹つて山三の許へ下女奉公をする。助太夫の娘で今は傾城となつた三浦屋小紫が權八を見染めたが、その小紫に心を惹かれたのは雪駄直し彌市である。神妙劍の巻は彌市の手に入る。(鈴ヶ森)白井權八が雪駄等を多勢斬る所へ、俠客彌市長兵衛が來かゝつて、彼の身を引調ける。(三幕)(鳥越山三浪宅)岩崎は傾城葛城となつて山三を訪ねて来る。お國も山三を慕ふ願ひは叶つたが、又平が山三を殺さうとする機嫌になり、門が彌市の手に入る。彌市は山三を助け、彌市が彌市の争ひを長兵衛お国お国が留める。(四幕)(山谷八百萬別荘)小紫を中に彌市、彌市の争ひ。彌市は權八は神妙劍殺しに小紫を騙して殺すが、系圖一巻は再び助八に奪はれる。(沙人堤非人小屋)小紫が身請けされて来たのは非人小屋。彌市は權八の實兄彌市はわざと名乗つて、小紫に殺される。助八が忍んで小紫を斬る。(六幕)(上林二階)葛城部屋)山三がこゝに忍んでゐる。伴左衛門は山三の身替りに葛城と契つたが後で實の兄と判つた。系圖の一巻は唐大權長兵衛の手に

入る。(七幕)(吉原田圃)山三住居)山三は怒つて葛城を殺したが、遺書によつて女の眞心が分つた。(大筋)長兵衛内八内住居)山三の家八内女房お梅は、良人に系圖の一巻を買はする爲め、身を賣らうとしたが、彌市に懇願で頭を傷つけられて果さない。偶然、一子お松が長兵衛の子に怪我をさせられたので、八内は岩松を殺して長兵衛内へ押しかけた。長兵衛は女房を賣つた金で權長から系圖を買ひ、八内の本心を知つて系圖を與へる。權八は八内お梅の手にかゝつて死ぬ。(山谷八内河原)山三は八内と共に伴左衛門を討ち、系圖と神妙劍を手に入れた。長兵衛が駆けつけて説く。

【脚色】山三、權八と筋が二派に分れてゐるのは南北の短所だが、後には各々獨立上演された。「鈴ヶ森」は在來のものに僅かに改訂しただけで、八内苦心の件は天下茶屋裏の人物、屋中右衛門そのまゝである。體當の場は歌舞伎十八番の「不破」前項を今様に和らげたので、南北作中、最も上演回数が多い。(二幕) 浮世草子 浮世草子 浮世草子 浮世草子

で、地味は上方、即ち京阪に行はれたものである。籍に江戸に作られたものもあるが、大體から見て、元禄時代に於ける上方の小説と解されてゐる。「名義」「うきよ」の題名には數種あるが、元禄時代の用語は主として二つあつた。一は世間又人生現實などの意で、他は好色の意である。前者は「浮世草子」「浮世草子」などの場合、後者は「浮世草子」「浮世草子」などの場合である。浮世草子の名義に於ける浮世の義は、この二者の内の何れかでなければならぬ。これを浮世草子の歴史から考へると、浮世本といふ名義の始めて文献に見えてゐる正徳頃までは、好色本全盛期であり、「元禄書目録」には、好色本は好色本として樂事の書と共に掲げ、町人物、武家物、各書等、物語の部に假名草子類と一緒に掲げられてゐる。これ等の事から考へると、この頃の浮世本は主として好色本を指してゐると思はれる。然るに、その後浮世草子の内容は變化して、好色以外の種々な生活に及び、古来の史實傳説等を材料としたものもあつたが、大體その時代の生活、寫實を中心として展開したものであるから、享保以後の浮世草子についていへば、浮世草子の名義は、當世生活を畫いたもの義に於けるが、最もよく當る。

【分類】書材の性質から、浮世草子を分類すれば大體次の通りになる。「好色本」「好色本」好色の事件を取扱つたもの。「町人物」町人物の經濟的生活を取扱つたもの。「武家物」武士階級の義理生活を取扱つたもの。「余草物」當世生活を取扱つたもの。例へば「大岡政談」(別項)や「風流今平家」(別項)の如きもの。「義判物」義判に

が勝つて来る。そして主家の悪口を言つて出
て行く。鏡右衛門が来て飛八の事や金持根性
の話をする。さうしてゐる所へ巫女が通りか
つたので、皆が巫女の口寄を聞かうといふ。

それから鏡五郎が隠居の髪にかゝる。いろいろ
の無駄口をいふ。宗旨の話になる。盲眼が
来る。若八が来る。若八が来て噂の話を大
仰に言ふ。御川武士の築兵衛が来て、吉原で
もてなかつた話を、なが／＼とする。隠居は
髪が出来て戻つてゆく。若八は少女をからか
ふ。

ら、不統一の弊もない。人物の出し方にも、
それ／＼の一段を演ぜしめる用意が見える。
各人物の個性には、皮肉を持つといはれるほ
ど、深さと細かさがある。(藤村、小宮)
浮世風呂(浮世の四時)を見よ。
浮世風呂(浮世の四時)は、四編九冊(作
者)式亭三馬(名)の著。前編二冊は文化五年九月
出版、翌六年正月刊行したが、同年火災で板
木を焼失し、文政三年十一月に再補刻して出
した。二編は文化六年己の重陽前後五日の急



つぎであるといつてゐるが、風呂に材を取つ
たことは『東海道御宿物語』(前編)や『寛政御宿
物語』(山崎宣綱、享和二年)などに得たのかも
知れない。
【初編】(朝湯の光景) まづ中風病み
の脈七が朝らぬ言葉で湯屋の戸を叩く。顔を
抜いた二十二三の男と湯杖を使ひながら来る
若者がある。二人がよい／＼をからかふ。そ
のうちに湯屋の戸が開く。脈七は柵欄口を入
つて鼻明を吹く。そこへ七十ばかりの隠居が
来る。若者のびんすけと昨夜の地獄の話をす
る。若者は追々入り込んで来る。
子供を連れて来た四十男もある。
徳藏と金兵衛とは昨夜は何處
へ行つたかと話し合ふ。先
判の隠居と若者とが話す。八
兵衛と松右衛門とが地主の零
落した話をする。田舎出の三
助が十能へ火を入れて来て、
山の芋が焼になつたことを田
舎言葉で話す。そのうちに風
呂の中で脈七が湯氣に上せて
目を醒し、大騒ぎとなる。(巻

の生解が来て、座頭の小袖をかくしてからか
ふ。勇みが見かねて生解を遣出すなど々々し
い光景である。
【二編】(朝湯より裏前の女湯の光景) 謎々染
の浴衣を着た十八九の女、料理屋の娘三十許
りの白痴の女が、客の話や芝居の話をする。
子供をつれた年増女などが子供の講高の事
流行のこと、娘の嫁入先の話、産の話を、奉公
の話などする。水樽の傍には老婆二人が扇箱
やら扇の悪口やらを言つてゐる。上方筋の女
房と江戸女とが、上方言葉と江戸言葉との優
劣論をしてゐる。脱衣場で子供等の喧嘩があ
る。風呂の中には醜態な女と無愛想な女と、
言葉の詭る女と夫婦喧嘩の話をしている。
子供の喧嘩から子供の母と祖母が互に口論く
り合ふ。これ等の連中の去つた後に姑と嫁
が来て、嫁が姑を大事に扱はぬ。その女中が
残つて嫁を養ひ、理想の夫に就いて話す。一
方には老婆と女房とが何より信心が必要だと
説く。三十四五の乳母と、十三四の子守とが
自分の守子について争ふ。上り口には鼻かけ
の年増が仲間と話してゐる。

不身持を嘆する母がある。屋敷下りの女中や
が喋つてゐる。義太夫語りの女房が来て淨瑠
璃本の話をする。
【三編】(再び男湯の光景) 伏である。風呂屋
の前を女の子湯湯が大勢喧嘩を叩つて行く。
涼んでゐる男と番頭とが盆踊りについて話す。
番頭は盆踊り三選を説いて、女の子にはやさし
いものを教へたいと言ふ。むだ助は環地より
性格が必要だと論ずる。他の男は妥協論をな
す。そこへ調停者の飛八が来て大法論を吹く。
倣倣作と異名ある男が来て冗談をいふ。俳諧
師鬼角が来て後援の話となる。何れも虚言と
駄法螺の混り合ひである。後は大衆。隠居の
晩右衛門が来て金銭の話をする。鬼角と商人
の談話とが、俳諧、地口の話をなす。豆本
田に結ぶた近頃の男と放蕩のため若隠居にな
つた男とが、この頃の生活状態と放蕩時代の
談をする。上方下りの調停者の若者が番頭と
話してゐる所へ、八百屋が前を通る。上方者
は番頭に偵切つて短気かな江戸ッ子を焦立た
せる。初編に出た脈七が来る。番頭にからか
はれてゐる所へ、店者が来て脈七を色男扱
にする。開吉と月八とが流行唄に通を振り回
す。馬鹿丁寧な言葉を使ふ俳助と開吉とが話
をする。風呂の隅に新内節を語る男の男が
来る。中腹の生解が騒々しいと怒鳴る。老人
が来て昔の自慢をし、芝居の今昔を論ずる。
中には、座頭が十四郎をさらひながら八人蔭
の景色をつかつてゐる。藤村の苦九郎が舞
草を食はせられた中津で踊る。座頭が
つゝゐる。他の客にはやされて苦九郎は夢中で踊
つてゐる。

に描きしようとしたものである。江戸小説の
平面的寫實の傾向は一般のことであるが、本
篇はその最も細微なものである。而も彼の著
者の著作に比すれば、眼界を擴大して多数の
人物を一書の中に寫したものである。描寫は
會話を主として、その内容を色々に變化させ、
言葉遣ひの階級、職業に由る區別を細寫し、そ
の上に各々の談話者の氣質性格を浮はせよう
とした點に於ては、彼の江戸小説の人物の選
み方を見ると、殆ど皆低級の江戸人、遊び人、
放蕩者、隠居、半可通、道楽人、生解、遊藝家、
客商家、但而非俳諧師などの類で、個々地方人
もある。何れも常識を缺き、圓滿な性格を持
たない爲めに、讀者の優越感は、自然に笑ひ
を催さしめる。こゝに本篇の滑稽が存在する。
【價值】三馬の作品は、黄表紙、合巻物、中本、
洒落本、讀本、繪巻物、百數十の多き上に、が
傑作として推稱すべきは滑稽本で、その内こ
の『浮世風呂』と『浮世床』(二編)とは最も有名
である。本篇の寫實はたとひ平面的であるとい
はれ、彼の代表作であるばかりでなく、又
當時の代表作でもある。その細かな生き生き
とした會話は、よく各階級の人物を活躍させ
てゐて、今日の言語研究者に重要な資料を供
給するものである。本篇の文學的價值も亦こ
の忠實な會話に依る寫實の優秀な點に在ると
言つてよい。(小宮)

【浮世名所圖會】(浮世の四時) 滑稽本 二
冊【作者】奥山四郎(名) 名所圖會に類し
て、人生の諸相を描いたもので、この名稱があ
る。(成立) 文政十二年(諸本) 滑稽本 作集
(帝國文庫) 下敷十二年(諸本) 滑稽本 作集
基礎として人事を地名に當てて、滑稽の中に
多少諷刺を含めてゐる。日次を示すと、一日目
の圖(二)子でる數二流行阿蘭陀科治(二)きぬ
ぎぬ別の體(二)下戸の立てたる藏屋(二)飛車手
王手の橋(二)てら／＼法師考の體(二)こけの切
道(二)大山師の玄關(二)伴作物(二)阿蘭陀鬼の切
つたる綱が手杖(二)その日ぐらしの夫婦石(二)か
かア大將の城(二)のたく山人の馬(二)二坊
上人の遺跡(二)こまの棧(二)いんぎんびれの
池(二)ほらふき堤(二)ふんばり尼の庵(二)いきなり
三寶堂の村(二)寶堂(二)金新田(二)しりくら
ひ坊生立の村(二)開寶堂(二)金新田(二)しりくら
ひ觀音堂(二)八丁堤(二)その阿蘭陀(二)二十四
條であり、形式からいへば、滑稽本の傍系的
なものである。これと似た滑稽本に、一筆庵
の『裏道中記』や、『裏道中記』(各別題)
などがある。(小宮)

【浮世物語】(浮世の四時) 假名字子 五卷【作
者】淺井了意(別名) 續可樂記【刊行】萬治
初年【諸本】初版は萬治三四年頃の京版。延
寶九年再版。江戸版は寛文十年正月松崎屋。
又元文二年に、大阪丹波屋から續可樂記と
改題したものが出てゐる。徳川文藝叢書第二
所載。

はせる面目なくて道心を得、名を浮世房と改めて、諸國修行を志し、京大阪地方を遍歴する中、生活の爲めいろ／＼の事に機はり、素人醫者を始めては遠慮で失敗し、大工の弟子となつては、怪我をしては嫌気がさし、こかしこ歩む歩くを見て、四五人の連の者が、御坊は異いやうでもあり、又氣が狂つてゐるやうでもあり、といふに、浮世房は狂果の喩を引いて、彼等の嘲弄を解いたのを、その中の一人が、これを奇として、さる大名に推薦することになり、目見えの時大名から宗旨を問はれて、浮世房は「たへて申すやう、それがはし上戸、衆にて候といふ、めづらしき宗旨かな、いづれの經より出たるをしへ」との給ふ、無任辯に出たりと申す、それはいづれの佛の說法ぞとの給へば、酒如來のとき給へりと言ふ、つとめ行には何をいたすととひ給へば、只御坊は御をつまぐり、どぶろくじの名號をとらへ奉るとこたへし云々、この經口を變でられて御座に話相手に抱へられ、この館に止まること暫時、或は侍の意を批判し、或は茶の湯の奉りを成め、世人の事より、輕薄表裏の侍を非難し、



法を學んで、換勝券を服し、いよ／＼天に昇らんと試みたが、屋根より墜落して腰を挫き、天仙飛仙はとて及ばぬ所と諦め、我が鏡仙となるべしと云つて、佛の如く、ゆきがたなく失せたが、跡には「今はわがこころぞ世にかへりけるのこるかたは佛のゆけ」の句が、御坊の胸に刻みこまれてゐた。【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

前で、長柄長者の娘梅ヶ枝が鳥籠から逃がした鶯が籠に追はれて危いのを助け、その籠から梅ヶ枝に深く囀る。母清は源之助の不在中に源者の爲めに源討に逢ふ。遂に源之助は長者から強ひて新に所望され、長者の邸で非人に似合ふ数々の手並を見せ、長者の邸に源者三右衛門にその素性を見抜かれて大衆を明かす。一方長者の妻玉木は大仁坊と密通して、長者を亡きものにして横領せんと企て、娘梅ヶ枝が非人の源之助を新に迎へたに事よせて、二人を追ひ出さんとす。遂に大仁坊は梅ヶ枝と長者とを殺す。源之助は光明山で敵の源善及び源太左衛門に出逢ひ、危難をまぬがれて源善を討ち、後、源太左衛門の父の仇源太左衛門と長者の仇大仁坊を討ち、本家を潰す。

【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

【浮世房】浮世房の放浪生活を筋として、時代精神の一面を具體化し、華佗安道の世界を構想し、期間行く風俗を摹写したもので、構想は幾分行書(草書)に準んだ所がある。即ち浮世房の遊歴から、京内参り、所々での狂歌がら」といふ一首の歌が残つてゐた。

ろげ

三三三

鯉と化し、尾を振り揺るがして心のまゝに...

【五】佛法師 伊勢の相可の人夢然はその子...

【六】青柳津の釜 青柳津の神主の娘良は...

【七】蛇性の婦 紀の國三輪が崎に豊産とい...

【八】青頭山 むかし快庵禪師といふ大徳の...



(中頭書) 廣 編 話 書 月 期

女がある。いつか心安くなり、その云ふがま...

斬の端に男の髻ばかり燈火に照し出された...

の事情を聞いて、獨り鬼となつた院主のある...

【題】「山家集」撰述抄にある西行の白濁語...

【二】「蓮花の約」は「古今小説」(唯世明言)等...

【三】「夢遊の舞」は「古今説海」第九卷の「魚龍記」の續案...

【四】「夢遊の舞」は「古今説海」第九卷の「魚龍記」の續案...

【五】「佛法師」は「怪談とのおぼけ」...

【六】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

子「巻五の「幽霊評話」の末尾、貝太鼓の音...

【七】「蛇性の婦」は「怪談とのおぼけ」...

【八】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

【九】「夢遊の舞」は「怪談とのおぼけ」...

【一〇】「佛法師」は「怪談とのおぼけ」...

【一一】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

前人未達の境地を開拓したものと、いへよう...

【一二】「佛法師」は「怪談とのおぼけ」...

【一三】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

【一四】「夢遊の舞」は「怪談とのおぼけ」...

【一五】「佛法師」は「怪談とのおぼけ」...

【一六】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

十五日御居座前相共共儀、抄付下地於社...

【一七】「佛法師」は「怪談とのおぼけ」...

【一八】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

【一九】「夢遊の舞」は「怪談とのおぼけ」...

【二〇】「佛法師」は「怪談とのおぼけ」...

【二一】「青柳津の釜」は「怪談とのおぼけ」...

穀が生り出たとする神話が、その一であり、日本書紀一巻「神代卷」の「大津比賣神に食を乞ふた時、鼻口より食を出して進めたので、怒つてこれを殺すと、頭に鷹目に稲穂、耳に粟、鼻に小豆、陰私に粟、尻に大豆が生り出た故、神代日神がこれを種としたといふ神話がある(『神代卷』)。

即ちこの神話の裏面若しくは精髄を殺すことにならぬ。大津比賣神、保食神が殺されたといふことは、這般の観念信仰の延長であるといふ。これ等の神話の何れが當つてゐるとしても、殺された神が食物神である以上、その神から生り出づるものは、食用植物であることを至當とする。従つて牛馬、粟等は後世の添加であらうと考へられる。日本民族の實際の文化から見て、穀物の方が一層古くから經濟生活上の價値物として知られて居り、牛馬、粟等はその生活に關係するやうになつたのは、それよりも後のことである。

「うけらが花」 歌文集 七卷四册(著者「加藤千庵」成立「刊行」享和二年「讀本」文化九年に再版が出た。歌の部のみは寶篋印菩薩全集下巻續日本歌學全書・近代歌家集第二巻(國歌大系)及び有朋堂文庫所収。【解説】享和元年九月の巨勢和の序文、同二年六月の自序があり、自序の由が見えてゐる。歌集は、四季・戀・雜・長歌に分ち、文詞二十六篇を附す。體裁には物名と風物歌とある。典書には「享和二年七月、廣田有年・吉井清・安井千之等とともに序なして、同川宮陰及び千之宮しりりぬ」と見え、題詠の外、折にふれて詠み出でた長い調書のある歌も散見する。【歌集】加賀及國産の萬葉集と異なり、なだらかにして雅情に富む中世風を理想とした優麗温雅な歌風で、關門の江戸派の歌風を最もよく代表してゐる。抒情の如き秀逸な作は見えない。長歌に至つては、多く萬葉調を模倣して、言葉遊びの巧みな歌がある。

出したので、京都人の氣に入つて大に好評を博した。これに勢を得て人形の衣裳をも美しくし、追々新作を出して益々評判よく、延寶五年閏十二月受領した。この頃から近松門左衛門の作品を上演して、いよゝ名聲を高めたが、興行主竹庄と仲違ひをしてから振はず、貞享二年下版して竹本義太夫と技を争つて失敗し、爾來京都に於て興行を續けて世を去つた。【門弟】加賀接の後、嘉太夫の名跡はその子によつて相繼ぎ、引續き四條河原に於て接芝居は興行された。門弟としては、野田若狭・富松藤摩・立花河内・宇治相模・宇治甚太夫等があつた。そのうち野田若狭は初め宇治伊太夫と稱へたが、竹本若狭伊右衛門の定芝居の太夫として出動した。また富松藤摩は、嘉太夫座の太夫として寶永・正徳より享保初年頃まで盛時として兩々相對して居つたが、次第に衰滅した。

明のものが多く、或は加賀後自身の作もあると傳へられるが、確證の存するものは僅々一二篇に過ぎずして、寧ろ貞享初年頃までのものには近松門左衛門の筆に成るものが多いのであつて、文學上から見てもこの期間の作が注目に値する。然るに元禄に入つて近松が主として竹本義太夫の爲めに執筆するやうになつてからの加賀接の諸作は、義太夫のそれに遠く及ばないやうになつた。

名「福太郎」福之助とも。後、紫鳳。父の一周忌に二代を襲名、明治八年隱居して因齋翁。同十二年九月十三日崩歿。享年五十九。法名、宇治紫雲道榮居士。墓所、初代に同じ。【三】代、江戸本所鎌倉町常陸屋といふ實屋の息。酒藏、鈴木保次郎。初名、菅野時清。後、二代紫鳳。更に三代紫雲と相稱。明治三十年十月二十一日歿。享年七十。【四代】現家元。三代紫雲の孫。本名鈴木木。初名、四代紫雲。明治三十二年四代家元を襲ぎ、大正十年四月一歳で紫雲齋と改め、今日に至る。【諸作】宇治派に限る語り物は四十餘段。自派の作を究めた段物集に「宇治文庫」別項がある。(中略)

【附記】「うけらが花」二編(五巻)は、享和二年の春より文化四年の彌生までの歌文を集め、門人の上木する所、巨勢利和の序文、文化五年八月の越前子園の跋文がある。又、「橋千庵歌集」といふ二冊本は、「うけらが花」の中より抄出したもので、伊能訓則の序文があり、嘉永四年刊。橋本相彦に「宇治氣負花」文化三年成、編纂者がある。(佐佐木)

これは斷定し難い。本書の説話を内容から見ると、佛敎思想に關するものが最も多く、經文が蛇となつて危地に陥つた男を救ふ話、越前教賀の女が觀音に祈つて好色者を得る話など、或は實者が佛法に歸依して富貴を得る話など、現世利益の懸念が、大體體裁に關する説話には、横川の實能知院の僧や藤原貴が地獄に墮ちるのを救はれる來世利益の懸念がある。なほ六編に關するものには、羊に生れ變る娘を殺す話、父が蛇になつたのを食つて變死する子供の話、蛇に生れる女性の話等、畜生道の説話、敏行の障地説話、目録と宇治山の鬼の話、附録の鬼、關城の蛇血鬼、堀取の鬼、百鬼夜行等、著明な説話がある。次に高僧達の法説話があつて、その有名なものは神觀僧正が草庵に雨を降らす話や、大徳の岩を斬り砕く話、寂照や清瀧川の聖の鉢を飛ぶ話等、現實を超越した法力である。以上の外、雀や龜の根拠説話、堀取の話、伴大納言等の夢に關する話、晴明等の占術に關する話、生實の話、仙人の話、鼻長の僧、本院侍従と平貞文、強盜等、天竺、僧具、本朝に互つての諸説話を収録してゐる。

【参考】外題年譜(操年代記)○紫竹集序文○輸入淨瑠璃史(聲曲類纂)○宇治加賀接正本(研究)○日本風俗史(研究) 第十八卷(浄瑠璃史)

【参考】一、中評史 鶴田實 〇江戸時代音楽通解 田中三〇一 中と蘭八 中川雲水 (聲曲全集) 十一

【参考】一、中評史 鶴田實 〇江戸時代音楽通解 田中三〇一 中と蘭八 中川雲水 (聲曲全集) 十一

【参考】一、中評史 鶴田實 〇江戸時代音楽通解 田中三〇一 中と蘭八 中川雲水 (聲曲全集) 十一

盛られてゐるの見逃せない。随求陀羅尼を頼りに...

言はせた人である。【著作】渡鳥集二冊 寶本...

ものである。【編出】宇治橋姫(内容) 嵯峨...

【参考】雁生門の鳥巻書久五 【鳥巻】宇治橋姫物語...

【挿話】瀬戸内海の一小漁村に、曾ては牛部屋...

何に強く働いてゐるか、痛切に感ぜしめる...

君、天立守、司命、司職、別しては○所領守三十...

の奴らに於ては、長く遠く根の深さの種まで...

略よるしからず」といふ主意に基いたものである。併し斯くの如き詞でも、續け柄によつては、よくもなると云つてゐる。...

薄紅葉 浮世草子 五巻【作者】未詳【刊行】享保七年【語本】江戸時代文藝資料第四所収【解説】...

薄紅葉の系統に立つたものである。一貫した人物を設けてあるが、それはたゞ形の上の目光をかへようとしたり過ぎない。...

うちは一筋に岸右衛門の消息を得つ。岸右衛門は江戸の山崎で兩替を替へ、運よく何萬兩の儲を得て大分限者になつたので、再び都に戻す。...

【作者】未詳【刊行】享保七年【語本】江戸時代文藝資料第四所収【解説】...

に作者の技巧も認められる。尤も艶書文學は『源河院御書合』に先例はあるが、これは主人公を設け小説の筋を立ててある所に異彩がある。...

の作は略とこの中に網羅されて居る。彼は元來多能多才の人であつたが、就中、俳諧の文章には最も妙を得、自ら「世の俳人ともかうも五七五はいふべし、只俳諧の文章は難し」と言つて、暗にその難きを著くする自信の意を仄めかしてゐる位である。...

松平定信と傳へてゐるが、確證はない。序跋にも著者未詳になつてゐる。『名稱』一名白川夜話【刊行】享保四年【解説】...

年あけを持つて歌菊と夫婦になる。【構想】「虚言八百萬八傳」の主人公貴屋の放蕩な朝旦とし、彼後を雪の理想から家國とぼかし、朝旦が行つて田や沼の雁鴨の足が凍つてゐるのを鏡で写つて描く場面は、二人の男が腰に魚籠をさげてる事から案じて、雁を腰にはさむとしたらしく、「たゞとる山のほととぎす」から得てゐるらしい部分は、腰に年あけを持つて歌菊と夫婦になる。...

これこそこの作品が多分の當世味を持ち、新しさを誇り得た所で、萬八傳を説し得てゐる點はこの原稿の旨味である。【小題】虚言八百萬八傳【作者】未詳【刊行】享保四年【語本】...

て、家富み萬歳の齡を保つた。【構想】安語の人編二部と朝城築川の噂から出した説で、めでたく夫婦になつた虚言八百萬八傳に暗示され、その後の雁の話を通して、ものとたゞとる山のほととぎすに話をもち、輪廓を前者から得、内容を後者から取つて案じたものである。...



萬丁三十同・萬丁十【虚言八百萬八傳】

事は、神宮文庫に蔵する「類歌合部類」に附せられてゐる。延寶二年寅仲冬日、正四位上藤原隆尹の集書に、「類歌合、千歳、寶藏、依懸、望、深書、先年、歌合部類、板行者有之、之故、外集兩名、類歌合部類、令、進賢之、事」とあるのによつても推知出来る。恐らく歌學研究の資料として、この頃よりやゝ前に編纂せられたものではなからうか。

【類歌・内容】刊本二十巻は次の體裁から成つてゐる。
【卷一】歌合目録(歌合の名稱・年月・判者の名を記す)天保四年内裏歌合(近江御所歌合)【卷二】若狭守藤原隆尹女子進賢令(高橋四七歌合)中宮高成宮御所歌合【卷三】住吉社歌合(高橋三年十月)延喜門北御所歌合【卷四】藤原社歌合(三年十月)新羅社歌合【卷五】寶篋院歌合(三年三月)新羅社歌合【卷六】右大臣家歌合(三年三月)新羅社歌合【卷七】百濟日御合(三年三月)新羅社歌合【卷八】藤原社歌合(三年三月)新羅社歌合【卷九】水御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十】新羅社歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十一】光明寺御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十二】日吉社歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十三】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十四】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十五】寶篋院歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十六】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十七】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十八】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷十九】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合【卷二十】延喜門北御所歌合(三年三月)新羅社歌合

全く内容を異にし、「(上巻)法住寺歌合、民部卿家歌合、類歌合(中巻)藤原自歌合五種、(下巻)八幡宮歌合、建保四年百番歌合、同六年十一月歌合、寛元元年河合社歌合を収めてゐる。各歌合は始めに題次、次に左右作者、列者の名を記し、歌合をのせ、終に勝負の數を表示した體裁で大部分が記載されてゐる。【解説】上記本書所載の歌合は、大部分群書類に於て系統的に見るに便である。歌合を大體に於て系統的に見るに便である。名稱は異なるが、「歌合類聚」(寛永二編、圖書寮に存)と「類聚歌合」(寛永、同上)等も、本書と性質の似たものと思はれる。これ等歌合の類集の目的は、櫻町天皇が、日野春枝に命じて給うて、六百番歌合・千五百番歌合の列詞中、歌學に關係ある三百二十九條を抜き出して、「歌合目録四巻」を作らしめられた事を経て考ふるも、集めて鑑賞するためよりも、研究資料としての目的によつたものと思はれる。

【歌行燈】小説【作者】泉鏡花【發表】明治四十三年一月「新小説」【刊行】同十四年一月「歌行燈」現代文藝叢書春陽堂、鏡花全集第八卷所載。
【梗概】熊鷹の宗家恩地源三郎の雙子喜多八は、養父と共に伊勢參宮の歸途、土地の按摩が同じ流儀の藝上手を誇つて宗山と競つてゐると聞き、若氣の至りから密かに訪れ、藝道の上下で侮辱を與へた。宗山は恨のお三重を残して歸死する。その爲めに喜多八は勘當され、且つ家の藝を封じられる。仕方なく博多節の門下に身を落して流浪する中に、繼母に賣ら

れて藝者に寄附したお三重に出會ひ、舞の一手を教へてやつた。偶々三年後の冬の一、夜、東海道邊の町に、同じ姿で漂泊してゐる所へ、源三郎が鼓の名手雪野老人と旅の歸りに一泊する。喜多八はその姿を見掛けて懐舊の餘り、うとん屋で酒を飲みながら、上さんと呼び込んだ按摩を相手に過去の所行を告白してゐた。と、遙かに旅館の一室から雪野の鼓が聞えて来るので、堪へ切れずにその門口に馳せ寄つた。鼓は養父、舞ひ手は偶然席に呼ばれたお三重。鼓行燈のかけから喜多八は、いつか聲を上げつて話の調に合はせてゐた。【解説】作者の藝術至上主義と神話主義とが融合して、圓熟の境地を示した作品である。年期をかけた重門家に対する職業神樂の意識は、女にあつては藝者が誇美的のとなり、男性では一藝に秀でた人物が作者の恩寵を受け心を得る。藝の眞髓に到達した者は、神に通ずる心を得る。彫刻師廣常の作つたさし置は、夜な夜な人の枕頭を離せ廻り、雪野の鼓、喜多八の鼓は、現實の世界に神話の境を顯現した。喜玉姫玉の縁談の對立がなく、説利な心理解剖の見られる傑出した作品である。(水上平也)

【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。
【歌占】「歌占」を見よ。

に、或る調子より他の調子に變じたのを、更に元の調子に返して歌ふ事を反歌と云ふと説く。また田歌則りに返と云ふ名稱があるが、これは普通の邊度より急邊度となり、更に元の邊度に戻る事と思はれる。これによれば、反歌は歌の音調又は邊度の變化する事を意味する。【田歌】志都歌の歌返と云ふ歌が「古事記」仁徳の條に七首出てゐる。この歌返を流布本に返歌とあるが、高橋寺本「古事記」を初め、信ずべき古寫本は總て歌返となつてゐるから、返歌とあるのは誤りである。また「歌返」に歌返と題する歌一首が出てゐる。「歌返」に「歌返」の和歌及び引継の語の付いてゐる歌詞を、分り易く書き改めると次の如くである。

且つその縁起を記して、仁徳天皇が八田の皇女を妃とし給つたので、皇后が大に恨み給うた爲め、帝は八田皇女に逢ひ給ふ事が出衆す、戀しく思召して逢ひ給うた御製としてゐる。而して「古事記」に志都歌の歌返として出てゐる七首の中六首は、同じく仁徳天皇と八田皇女との御間柄を、皇后の恨み給うた事に關してゐる歌である。これによつて考へると、「歌返」の歌返も、又正しくは志都歌の歌返と名づくべく、「古事記」に入つてゐる大歌の遺傳として、かの傳説歌の間に挿入すべき歌である。且つ「歌返」では、この歌返を志都歌の次に出してゐるのも、兩者關係があり、

この歌は、歌返たる所以であらうかと思はれる。...

歌垣

【歌垣】人が垣のやうに立ち廻つて歌ふこと。...

この歌は、歌返たる所以であらうかと思はれる。...

うたかたの記

小説【作者】森島外【発表】明治二十三年八月...

歌かたり

【歌かたり】歌集【著者】村田...

歌かたり

【歌かたり】歌集【著者】村田...

歌かたり

【歌かたり】歌集【著者】村田...

歌かたり

【歌かたり】歌集【著者】村田...



(歌謡家調倫人) 文 葉

真の信仰に生きた山伏連がもじり祭文の如き祭樂を作り出し、遂には苦行の伴ふ山伏を棄てて、祭樂本位の祭文だけを専業にして生計を立てる者が生ずるに至つたと考へられる。この祭樂祭文を稱して歌謡文といつたのである。祭文はもと聲明の調子文系に属して曲調も謡歌味のものであつたが、俗人の興味に合せしめようとして種々時勢性の曲節を取入れ、はてはそり節となつて語り物に近接したが爲めに歌謡文の名を附せられたのであらうが、この語の生じた時代は明かでない。但し、

歌謡文の源流をせよといふことは、さうも難なくはなして、勿論なし。故にのせるはさうも難し、勿論なし。とあるが、元禄時代に歌謡文の源流をのせることは、上方地方にも盛んに行はれて、心中監落・春遊等市井の出来事を材としたが、門附や遊樂の間の曲調で演ずる狂歌、因定した定座で演ずるまでには榮えなかつた。従つて名手と稱すべき者の名も傳はつてゐない、却つて傳へられたのは、巧みであつた者が傳へられてゐる。

歌謡文の源流をせよといふことは、さうも難なくはなして、勿論なし。故にのせるはさうも難し、勿論なし。とあるが、元禄時代に歌謡文の源流をのせることは、上方地方にも盛んに行はれて、心中監落・春遊等市井の出来事を材としたが、門附や遊樂の間の曲調で演ずる狂歌、因定した定座で演ずるまでには榮えなかつた。従つて名手と稱すべき者の名も傳はつてゐない、却つて傳へられたのは、巧みであつた者が傳へられてゐる。

も定形が無い。當初の同人は遊びぬいた通人や、魚屋・火消・妓女上り・三味線弾といふ人達であつた。自然遊里風分を講つたのが多いが、古原といふより深川趣味のものであつた。目につくことは古歌などの引用に富むことである。左に特色あるもの二首を示す。

歌謡文の源流をせよといふことは、さうも難なくはなして、勿論なし。故にのせるはさうも難し、勿論なし。とあるが、元禄時代に歌謡文の源流をのせることは、上方地方にも盛んに行はれて、心中監落・春遊等市井の出来事を材としたが、門附や遊樂の間の曲調で演ずる狂歌、因定した定座で演ずるまでには榮えなかつた。従つて名手と稱すべき者の名も傳はつてゐない、却つて傳へられたのは、巧みであつた者が傳へられてゐる。

歌謡文の源流をせよといふことは、さうも難なくはなして、勿論なし。故にのせるはさうも難し、勿論なし。とあるが、元禄時代に歌謡文の源流をのせることは、上方地方にも盛んに行はれて、心中監落・春遊等市井の出来事を材としたが、門附や遊樂の間の曲調で演ずる狂歌、因定した定座で演ずるまでには榮えなかつた。従つて名手と稱すべき者の名も傳はつてゐない、却つて傳へられたのは、巧みであつた者が傳へられてゐる。

歌謡文の源流をせよといふことは、さうも難なくはなして、勿論なし。故にのせるはさうも難し、勿論なし。とあるが、元禄時代に歌謡文の源流をのせることは、上方地方にも盛んに行はれて、心中監落・春遊等市井の出来事を材としたが、門附や遊樂の間の曲調で演ずる狂歌、因定した定座で演ずるまでには榮えなかつた。従つて名手と稱すべき者の名も傳はつてゐない、却つて傳へられたのは、巧みであつた者が傳へられてゐる。



(歌謡家調倫人) 文 葉

も定形が無い。當初の同人は遊びぬいた通人や、魚屋・火消・妓女上り・三味線弾といふ人達であつた。自然遊里風分を講つたのが多いが、古原といふより深川趣味のものであつた。目につくことは古歌などの引用に富むことである。左に特色あるもの二首を示す。

横・清河・花橋・老楓・中飽・後梅(一)の四病の中、中飽は第一句の初字と第二句の初字と...

ずしも詩學のそれと同一でない所に歌學に於ける病の改題といふ事が行はれたのである。

一律高い短い笛を作つたものと思はれる。それは俗樂調たる東遊の伴奏に用ひられたのであらう。

かす。(四)詞のよきわるきを定む。(五)楽を撰めるに故ある事を記す。(六)優れてよき歌を求むべし。

とりて詠む類で所謂本歌取の歌である。而して一首の上これら諸病が重つて現はれる事を述べてゐる。

高崎正風の歌謡歌話を集めたもの。歌謡は主として豊前説を承け、特に獨創的な點は見られぬ。

をも、「萬葉集」を扱ふ足らぬ心地歎けといひ、引いて、買之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。

打開集 佛敎説話【著者】未詳。現存本は表紙に桑田宗源とあり。これが所持者で、同時に寫手でもあつたらう。

【楽観】馬場の作品の特徴は、演劇を題材とした事である。...

腕くらべ

【小説】永井荷風【作者】永井荷風【発表】大正五年八月より同六年九月まで...

【挿話】駒代は七年ばかり引いてゐてまた新橋から出ると、まもなくもとの馴染客吉岡に...

肌をはじめて知つた駒代は、それからといふものすつかり夢中で、さんざん無理をして入れ...

善知鳥安方忠義傳

【小説】山東京傳【作者】山東京傳【第一編】...

【挿話】作者が「はしがき」に戯作者めいた文字を弄して、「初めは志いまだ定まらざりし二十...

を千載に傳へおのれはいたづらなる筆をなめて十八年世の憎しみを受け人のそしりを招き...

優華物語

【小説】山東京傳【挿話】喜多武清【名譽】...

【挿話】「優華物語」の物語は百年前の古書を得て世に現はす。...

等には現はれてゐる傳説に據るものも見える。【挿話】（第一編）永平二年下總に相馬内裏を...

うとん

【小説】山東京傳【挿話】喜多武清【名譽】...

【挿話】「うとん」の物語は百年前の古書を得て世に現はす。...

後復不知の岩穴で、千代童を連れだす岩窟開光に遭つたが、忠告されてこれを斬り、立山に...

【挿話】「うとん」の物語は百年前の古書を得て世に現はす。...

【挿話】「うとん」の物語は百年前の古書を得て世に現はす。...

【挿話】「うとん」の物語は百年前の古書を得て世に現はす。...

女とした次第を話し、共に俊二郎が故郷肥後...

【備註】俊二郎を主とする敵討話と、弓兒を...

海上風平の「敵討」(通稱) 六郎...

じ、又同縣勸業課に勤め、同十六年辭して上京...

宇野浩二の「小説家」(本名) 格次...

「苦の世界」(通稱) 前巻は江戸時代...

「卵花園漫筆」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

巧妙な話術によつて滑稽諷刺の中に一服の悲...

「卵花園漫筆」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

一人の心は水の如し以下二百九十二則 巻二...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

「馬草紙」(通稱) 前巻は江戸時代...

「宇合」(通稱) 前巻は江戸時代...

話は、夙々ミス・コックスが発見したやうに、通...

たといふことが、この不思議な衣料の國々の...

頼いてやつてから、急にその人間の力が強く...

つてゐる。現在諸國に残つた産女の傳説が、...

お高は北一番の通り者といはれる茶屋明石屋のおつげに頼んで、彌市に逢ふ手段として...

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

言ふとなく彌市、東方は彌野を召して、隠居に處分させ、おさきを伯母の許に頼らせる。...

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

假名草子から浮世草子への展開の時代風を示す作品として注意されるものである。...

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

と同じ夢を見、その若衆戀しきの心が動き、出入の女お時に頼まれて髪を伸ばし、元のお八重に歸つた。...

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

實感が迫ってくるものがある。余吉が妹の思義から七三郎と戀中になる描寫も比較的自然而、その個性の現れて居るのは、彼の作としては珍しい。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

の現れたのは、勿論時代の推移に依るとは、その先驅をなした彼の功績は認められて、それらに、門系二世は其原乙彦(彌市)が繼いだ。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

て吉田家を再興するといふのである。これは浮世草子の作より餘程お家騒動の色彩が濃厚であるが、結構の複雑と趣向の珍奇を以て、浮世草子に新味を出さうとしたものである。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

埋木(本編) 佛蘭西日一册【撰者】北村季吟(本編) 講談社【刊行】延寶元年仲冬(成立) 本文は師走二十九日埋木の由を記してゐるが、明暦二年正月五日に重ねて校合した議論があるから、埋木は蓋しその前年明暦元年である。...

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

【梅の由緒】彌市の姉お千代が弟の戀の爲めに身を犠牲にするといふ情愛と、和泉屋多助の敵役の仕打とを設けて、心中の動機を稱へた作意で、海音の世話物によく見る仕組である。

名義、本著文庫本御伽草子等所載。又必ずしも御伽本と直接關係あるもののみとは断じ難い...

【内容】丹後の浦島傳説を題材とした本。古傳説と異なる所は、主人公が浦島の息子の浦島太郎(浦島子)が太郎となつたのはこの書からである...

【附記】浦の沙貝拾遺(四巻)は、門人尾張津島の人茂之と、難波の人雅之の編せるもので、安政三年の香川豊恒の序文がある...

【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから、慶長十四年以後の作か...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

【うらみのすけ】假名草子 二巻【作者】未詳【成立】巻一の首に、慶長九年とあるが、好色本目録に據れば、文政四年豊田秀次没亡の時、二歳の少女が十六歳になつた時の事件とあるから...

い作風の勃興に貢献した功は寧ろ「恨之介」の方であつた。

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

【ウラル語系】(甲)フィンウグリア語系(Finno-Ugric) 一、フィンランド語、二、ムム語(Uralic) 一、フィンランド語、二、ムム語(Uralic) 一、フィンランド語、二、ムム語(Uralic)...

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

【ウラルアルタイ語族】世界の諸族のUral-Altaic Family of Languages (Ural-Altaic Sprachfamilie) Des Langues ouralo-altaïques (Ural-Altaic) 等がツレニエニアン語族(Uraltian)と名づけたこともある。

宗味は若殿のお供で、急に歸國することにな

り、幸介は宗味を迎へるために留守宅に来て

色々指圖をし、松江の名物なますをつくら

せなどして用意する。おきよの腹はずいで七

たものである。 [石林] 附録四

福藏秘策 うんざう 蘭華 三巻 附録四

一に此書は予若年の頃より傳記を好んで著く諸

の創設の時期に關しては、これを明證する文

獻がなく、宅嗣の晩年、即ち寶龜末とする説

成はそれより少し過つて、寶龜二年頃かと

た。この事は寛政八年兼段室の本書序文及び

中井氏(阿花開志)のはしげに見える。

【解説】兼段室の序中に「其平生、蘭、開所、蘭

えゑ

畫虎二面鏡(作者)柳亭種彦(書工)

に法律の勉強を勧められて、辯護士になつた

が、その頃になつて自分は父の實子でなく馬

智入りの夜、お夏は父が買つた刀を持ち清十

合巻 六冊合二冊(作者)柳亭種彦(書工)

【解説】此書は予若年の頃より傳記を好んで著く諸



繪口(圖面二編 後編)

地のある浄瑠璃風に書いたのが、この作の特

に参拜し、同寺で行はれる朝十三回忌の舞樂の下稽古を観る。こゝは「試樂ちの舞」から「香樂樂」の節事の章。三人はこゝで朝比奈の妻にも逢ふ。(四段)香樂等は實朝の歌道の妻である定家に教免の取りなしを乞はうと、放鳥實に扮して上洛する。「いつきの歌道行」。その途上で城之介平太にも逢ひ、また入道の郎黨を生捕つて入道主從事の證據を手に入れる。(五段)和田一門の平太の命乞ひの訴訟より、入道の悪事露顯で萬事めでたく解決する。

【参考】近松全集第六卷解説書乙卯(五七)益軒(姓名)具原篤信。字は子誠。通稱久兵衛(別號)出軒(生歿)寛永七年十一月十四日筑前國岡田城内に生れ、正徳四年(三七四)八月二十七日歿す。享年八十五。【墓所】福岡市西町金龍寺(開歷)世々黒田侯に仕へ、父篤信は醫を業とした。明暦三年京師に遊び、山崎闇斎・松久尺五・木下順庵に従つて學ぶこと三年、業大に進んだ。初め頼る陸王の學を喜んだが、三十六歳の時陣建の「深書通辨」を読み、これを「尙書二論」に實して「學書」を著し、専ら朱子の説を採擷するに至つた。晩年朱子の學の佛老を嫌ふるを悟り、八十五歳の時「大疑錄」を著し、併し敢て朱子を排するでもなく、ただその開眼を補ひ、これを完全ならしめんとしたのである。



益軒 益 原 具

【参考】益軒(姓名)具原篤信。字は子誠。通稱久兵衛(別號)出軒(生歿)寛永七年十一月十四日筑前國岡田城内に生れ、正徳四年(三七四)八月二十七日歿す。享年八十五。【墓所】福岡市西町金龍寺(開歷)世々黒田侯に仕へ、父篤信は醫を業とした。明暦三年京師に遊び、山崎闇斎・松久尺五・木下順庵に従つて學ぶこと三年、業大に進んだ。初め頼る陸王の學を喜んだが、三十六歳の時陣建の「深書通辨」を読み、これを「尙書二論」に實して「學書」を著し、専ら朱子の説を採擷するに至つた。晩年朱子の學の佛老を嫌ふるを悟り、八十五歳の時「大疑錄」を著し、併し敢て朱子を排するでもなく、ただその開眼を補ひ、これを完全ならしめんとしたのである。

【家訓】一巻。貞享四年、五十八歳の作。一般の家訓に對し、子孫教育の準則を説いたもので、具原家の家訓ではない。聖學須知・幼兒須知・士氣勿忘の三章から成る。他の九訓(殊に和尙童子訓と主旨を一にし、山鹿素行の「武教小學」と相類似して、本邦家庭教育の書として重んずべきものである)。

【和尙訓】八巻。寛永五年、七十九歳の作。十訓中最も紙数多く、爲學上、爲學下、心術上、心術下、衣服言語、射行上、射行下、應接合せて八巻ある。爲學では、性・道・教・氣・質・人・欲・良知・學・立志・知行等を和尙學の見地から論じて、平易に説き、學問の工夫、讀書の法を親切に述べた。心術は心を正しくすること、大體「中庸」を本とし、七情過不及なしといふ所に歸着する。射行は禮儀言動、日常生活上の心得、應接は事に應じ、人に接はるといふ意味で、その中には禮儀も含まれてゐる。すべて儒學が本になつてゐるが、本邦の風俗習慣に照して適切に説かれてゐる所は大和の二字に背かない。

【和尙童子訓】五巻。寛永七年、八十一歳の作。兒童の教育に關する益軒の意見である。これ以前にも教育に關する意見は他の學者も述べてゐるが、何れも断片的なものに過ぎない。その點、本書は最も調まつた形を具へて居り、本邦教育書の最初と見ることが出来る。卷一は總論で、儒教主義に基いて教育の意義目的を示し、實踐的な方面に關し、乳母、附人の選び方、惡習の矯正、兒童の遊戯、言語造ひ、禮儀作法、教師友人の選び方等を説いてゐる。武士階級を主としてゐるが、百姓

町人の教育にも及んでゐる。卷三は儒學教法と讀書法、卷四は手習法、卷五は教女子法となつてゐる。儒學教法は、六歳から二十歳まで、兒童の成長に應じて學習の順序を立てたものである。讀書法と手習法を通じて見ると、當時別々になつてゐた漢學塾と寺子屋の教育を一系統に収めた形になつてゐて、讀書法と手習法を「和漢名教」(益軒書)を教材に使用し、往來物をも教へ、當時漢語と漢書とが全く別になつてゐたのに反對して、初歩の讀書教授の間に漢義を大略説き示すといひ、又當時「大學」とか「孝經」とか一部の成書をその儘兒童に授けた習慣を排し、最初に讀書の中から文句短く、解し易い文章を選んで授け、兒童の程度に應じて徐々に讀書方を進めることを論じてゐる點などは注意すべきである。又多くの學者はその説くところ殆ど文にのみ限られてゐるが、益軒は文武を合せて論じてゐる。教女子法では和服を以て婦徳の第一とし、所謂良妻賢母主義である。又算術の必要をも説いた。小唄・浄瑠璃・三味線を斥けてゐるが、雅正な音楽は女子にも男子にも必要としてゐる。更に當時「伊勢」(源氏)類は上流女子の必讀書と考へられてゐたが、益軒は「かやうの通俗の事を記せるふかみ」を早く見せしむべからずといひ、女子の和歌に就ては「深重なき百歌多く讀まして、風雅の道を知らしむべし」といつてゐる。終りに讀書のもの心得十三箇條がある(女大學參照)。

【家訓】一巻。貞享四年、五十八歳の作。一般の家訓に對し、子孫教育の準則を説いたもので、具原家の家訓ではない。聖學須知・幼兒須知・士氣勿忘の三章から成る。他の九訓(殊に和尙童子訓と主旨を一にし、山鹿素行の「武教小學」と相類似して、本邦家庭教育の書として重んずべきものである)。

【和尙訓】八巻。寛永五年、七十九歳の作。十訓中最も紙数多く、爲學上、爲學下、心術上、心術下、衣服言語、射行上、射行下、應接合せて八巻ある。爲學では、性・道・教・氣・質・人・欲・良知・學・立志・知行等を和尙學の見地から論じて、平易に説き、學問の工夫、讀書の法を親切に述べた。心術は心を正しくすること、大體「中庸」を本とし、七情過不及なしといふ所に歸着する。射行は禮儀言動、日常生活上の心得、應接は事に應じ、人に接はるといふ意味で、その中には禮儀も含まれてゐる。すべて儒學が本になつてゐるが、本邦の風俗習慣に照して適切に説かれてゐる所は大和の二字に背かない。

【和尙童子訓】五巻。寛永七年、八十一歳の作。兒童の教育に關する益軒の意見である。これ以前にも教育に關する意見は他の學者も述べてゐるが、何れも断片的なものに過ぎない。その點、本書は最も調まつた形を具へて居り、本邦教育書の最初と見ることが出来る。卷一は總論で、儒教主義に基いて教育の意義目的を示し、實踐的な方面に關し、乳母、附人の選び方、惡習の矯正、兒童の遊戯、言語造ひ、禮儀作法、教師友人の選び方等を説いてゐる。武士階級を主としてゐるが、百姓

【家訓】一巻。貞享四年、五十八歳の作。一般の家訓に對し、子孫教育の準則を説いたもので、具原家の家訓ではない。聖學須知・幼兒須知・士氣勿忘の三章から成る。他の九訓(殊に和尙童子訓と主旨を一にし、山鹿素行の「武教小學」と相類似して、本邦家庭教育の書として重んずべきものである)。

【和尙訓】八巻。寛永五年、七十九歳の作。十訓中最も紙数多く、爲學上、爲學下、心術上、心術下、衣服言語、射行上、射行下、應接合せて八巻ある。爲學では、性・道・教・氣・質・人・欲・良知・學・立志・知行等を和尙學の見地から論じて、平易に説き、學問の工夫、讀書の法を親切に述べた。心術は心を正しくすること、大體「中庸」を本とし、七情過不及なしといふ所に歸着する。射行は禮儀言動、日常生活上の心得、應接は事に應じ、人に接はるといふ意味で、その中には禮儀も含まれてゐる。すべて儒學が本になつてゐるが、本邦の風俗習慣に照して適切に説かれてゐる所は大和の二字に背かない。

【和尙童子訓】五巻。寛永七年、八十一歳の作。兒童の教育に關する益軒の意見である。これ以前にも教育に關する意見は他の學者も述べてゐるが、何れも断片的なものに過ぎない。その點、本書は最も調まつた形を具へて居り、本邦教育書の最初と見ることが出来る。卷一は總論で、儒教主義に基いて教育の意義目的を示し、實踐的な方面に關し、乳母、附人の選び方、惡習の矯正、兒童の遊戯、言語造ひ、禮儀作法、教師友人の選び方等を説いてゐる。武士階級を主としてゐるが、百姓

【和尙童子訓】五巻。寛永七年、八十一歳の作。兒童の教育に關する益軒の意見である。これ以前にも教育に關する意見は他の學者も述べてゐるが、何れも断片的なものに過ぎない。その點、本書は最も調まつた形を具へて居り、本邦教育書の最初と見ることが出来る。卷一は總論で、儒教主義に基いて教育の意義目的を示し、實踐的な方面に關し、乳母、附人の選び方、惡習の矯正、兒童の遊戯、言語造ひ、禮儀作法、教師友人の選び方等を説いてゐる。武士階級を主としてゐるが、百姓

者三友のちり。別に「馬鹿夜話」とも云ひ、「...

【内容】新近近きを無有と露時雨がふらついで居ると、...

【内容】新近近きを無有と露時雨がふらついで居ると、...

月間東京日日新聞記者となつた。同九年始め...

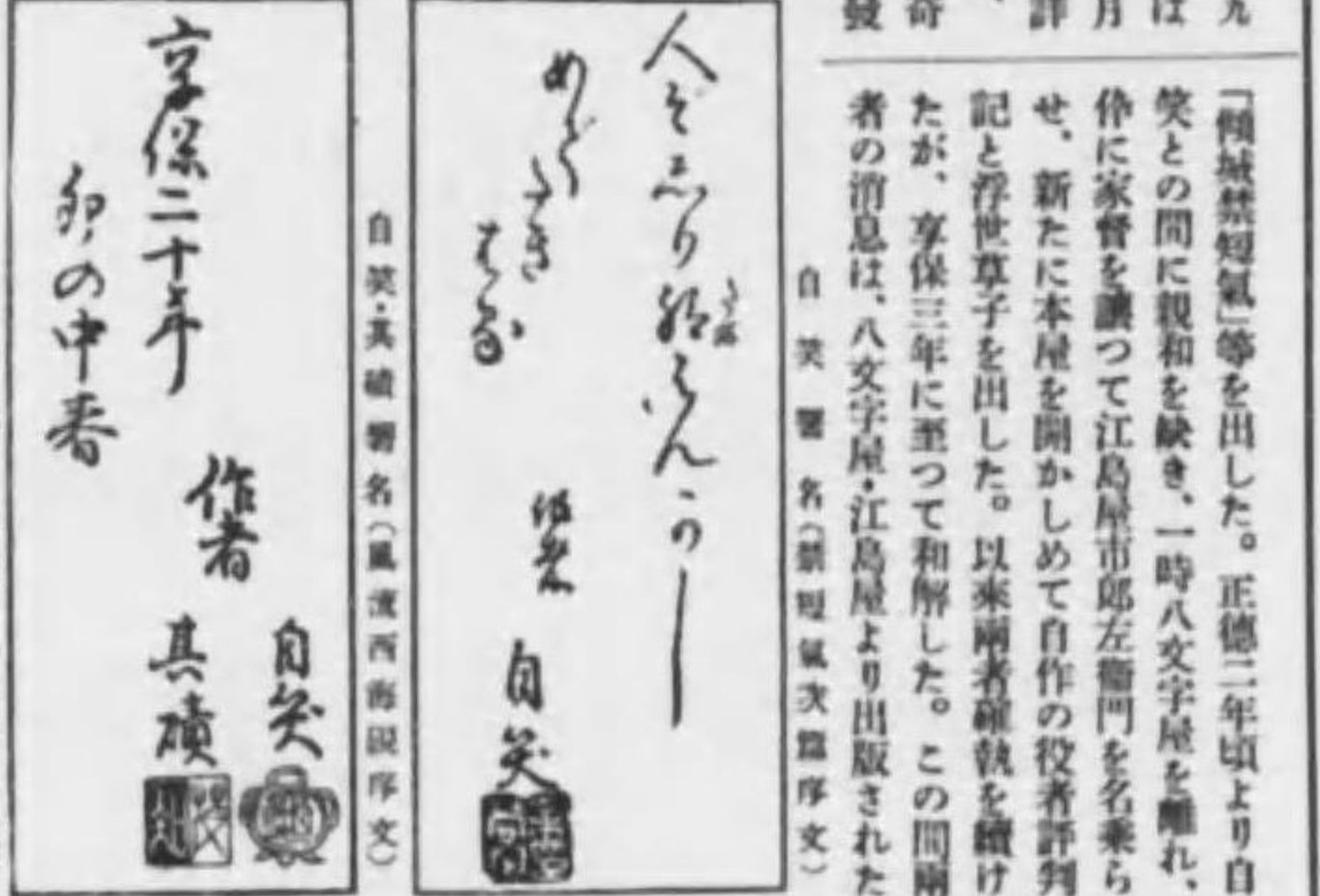
るに因を見せに遣はしたが歸つて来て、年貢は既に先の領主が取つて無く、...

去りぬ云々」とあるに依つて元文元年(三九六)...

「傾城禁短氣」等を出した。正徳三年頃より自笑との間に親和を疑ひ、...

夫のために書いた浄瑠璃であることは、「役者目利論」の序に依つて知られるが、...

大内東支度(自笑、自笑) 同十三年 自笑(自笑) 同十三年...



傾城禁短氣 自笑 其の著者(女人心腹記序文) 元文二十年 自笑 其の著者...

する機體の道行の詞、藝者の版込の詞、道刺の詞など、見るべきものが多い。

【備考】『神文谷利生四竹節』寛政元年版、豊次郎の二子豊太郎は、神文谷の仁王様から授けられた假面であり、質剛賢屋の一人娘の婿となり、次第に大自惚となる。後、假面が落ちて醜男にかへつて醜態になり、悟を聞いて、仁王から授けられた竹刺甘藷糖を商ふ。

【呼聲金成稿】『呼聲』豊次郎は二丁町の小の原の所に流連してゐる金成を愛子に定める。金成は遊女小の原と狂言心中をして、府中に存名を立てんとしたが、失敗して精進庵に金一千兩を興へ許して貰ふ。歸途、道中々々の飯屋に金を興へて、色男が通るとて追掛けさせる。

江戸狂言

【参考】『江戸狂言』上方狂言の代表的名作は元禄の元禄市川團十郎からその時代に傳承する歌舞伎十八番、別項の狂言で、その大時代大まかな要素は江戸狂言の傾向から出たものである。次いで、江戸狂言の生世話物として完成された所謂生世話物で、上方狂言が人形劇の技巧に感化されて誇張的の演出から脱し、切れぬうちに、江戸狂言の生世話物は一步を先んじて、寫實に徹してゐた。

江戸近世所名集

明治初年まで餘幅を保つてゐた。【参考】『江戸近世所名集』上方狂言の代表的名作は元禄の元禄市川團十郎からその時代に傳承する歌舞伎十八番、別項の狂言で、その大時代大まかな要素は江戸狂言の傾向から出たものである。次いで、江戸狂言の生世話物として完成された所謂生世話物で、上方狂言が人形劇の技巧に感化されて誇張的の演出から脱し、切れぬうちに、江戸狂言の生世話物は一步を先んじて、寫實に徹してゐた。

【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」

【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」

【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」【備考】『三世一漁』刊行「安永三年」

江戸時代戯曲小説通志

新風を鼓吹する意氣に燃えてゐた事も頷はれる。【備考】『江戸時代戯曲小説通志』

江戸時代の漢詩

【備考】『江戸時代の漢詩』

その職は建築の裝飾より障子屏風の額を畫いた。なほ後世には朝廷の繪所以外に大なる神社佛寺ではそれ、別に書事を掌るものを置いたが、それを繪所と稱した。春日神社、東大寺等に屬するものは、普通に春日繪所、東大寺繪所などと稱した。而してこの名稱は長く存續して徳川時代にまで及んでゐる。

【備考】『江戸時代の漢詩』

【備考】『江戸時代の漢詩』

江戸時代の漢詩

【備考】『江戸時代の漢詩』

【備考】『江戸時代の漢詩』

【備考】『江戸時代の漢詩』

【備考】『江戸時代の漢詩』

江戸時代の漢詩

【備考】『江戸時代の漢詩』

した。特に山陽は徒に漢人の口吻に擬するの趣を覺り、務めて我邦特有の風味を造る事に苦心し、どこまでも日本人の詩たらしめようとし、實際に即した活きた詩を作らうと工夫した。されば好んで我邦の史實を詩化した。こゝが山陽の一異彩である。星屋は初め山本北山の説を率じて宋詩に沈溺したが、後葛西因是の唐詩を講ずるを聴くに及んで、遂に唐詩を崇奉し、後、清人、特に浙西六家の詩を愛して、その風を取り入れた。彼は幕政以後第一等の詩人で、特に七言律に長じてゐた。明治の詩壇に活躍した作家は皆彼の門下である。

江戸時代文學

【解説】國文學史上に於ける時代的區分の一。江戸時代といふのは、國史上の時代區分であるが、國文學史上に移しても適當だとされて、今一般に用ひられてゐるものである。この時代に於ける文學現象は、これをその前後の時代に比すれば、大なる特徴を有して、儼然たる一時代をなしてゐる。その最も著しい點は、從來一較文化と共に、文學は公卿・武士・僧侶の階級に占有されてゐたが、この時代に至つて、町人階級の社會的經濟的勢力の増加に隨つて、文學も彼等の手に歸し、町人文學が勃興して、遂に極盛の境に達したことである。これに依つて、この時代を町人文學の時代とも稱してゐる。

【時代的小區分】(前期)元禄期(一七〇一—一七四〇頃) 平安時代以後の長い因襲に因はれて、その生命を失ひ、唯形骸のみ傳へた文學が影を薄うして、新に擡頭した町人階級の中から、新しい生命を有つた新しい文學を生み出した時期である。なほこれを二期に分ち、紀元二

三四〇年頃を界とし、前期を元禄期、後期を元禄期とする人もある。後期の文學は、内容形式共に往時時代の因襲を多く保つて、漸く新文學の萌芽をその中に含んでゐるに過ぎない。且つ童蒙の教訓啓蒙の目的を有するものが多い事を特徴とする。元禄期に至つて國民の精神は因襲の拘束を脱しようとして二つの方向を取つた。その一は、長く因襲のために抑壓された生命力が、平和の光に一陽來復の機會を得て、こゝに因襲の窮乏な衣服を脱ぎ棄てて、人間又日本民族の本然の相に立ち復らうとした復古的精神である。これが現れて古學の勃興、古典研究となつて、新文學のために一の基礎を作つた。他の一は、新しい時代生活の内面を省みて、こゝに新しい生命を求めた精神で、歴史、因襲を離れて、全く新しい文學を創造したものである。今少し具体的に説明すると、本期に於て、和歌界には萬葉研究が起つて、次期の萬葉復讐の基を備へ、俳諧方面に於ては、芭蕉が在來の生活や俳諧の狀態に據らずとして、自然の中に眞の人間生活と、眞の俳諧文學とを見出さうとしたのは、何れも復古精神の現れである。近松、義太夫が在來の浮世囃子を集成すると共に、新時代のなるものを加へて新浄瑠璃を完成したのと、西鶴が浮世草子に、新内容、新形態の文學を創始したのとは、新時代生活の内部に求め得たものである。而して後者は時代を支配した新興町人階級の精神の生み出したもので、これが元禄文學の花と稱せられる。

中期

【中期】(和安末期又文政初期) 一七五〇頃—一八〇〇頃 此の期に於て一般文化と共に文學は、その中心地を上方から江戸に移動した。文政東漸

期の名は、このために附けられたものである。さしして隆盛を極めた元禄文學も、その何の種類たるを問はず、大抵凋落の時代に入つてゐるが、唯前期に於て復活の曙光を見た和歌が著しい一展開をなしたのと、俳諧の芭蕉以後の衰微の中から、新機運を生じたに活氣を見る。これと共に又一方に於ては、中心地の移動に伴つて、新文學の萌芽と展開を示して、發生發展の土地の意味でいはれる江戸文學、新形の發生期となつてゐる。

後期

【後期】(文化文政期) 一八〇〇頃—一八五〇頃 此の期に於ては、江戸が文化の中心地として繁榮したが、文學史上でも亦所謂江戸文學の時期である。儒學が普及してその功利主義的精神が弘通したのと、平和生活の享樂に馴れて、江戸市人の感情が細かになり、趣味が精巧になり、通が生活を支配するやうになつて、江戸文學は通の文學、趣味の文學となつた。元禄文學のやうな新しい生命が失はれた代りに、趣味の精緻精巧を遺ふ所の遊藝文學が生れてゐる。文學形態は多種であるが、何れも高い理想を缺いて、卑近な現實の寫實と、滑稽、滑稽の感情、氣分に興するものとなつてゐる。

階級的區分

【階級的區分】この時代の文學は又これを階級的に區分して、武士文學、町人文學にも分けられる。武士と町人とは最も有力な社會階級で成立し、歴史、職務職業生活様式などを異にしてゐたため、彼等は自然に特殊な文學上の分野を有つてゐた。武士階級は知識階級に於ても最も高貴であり、その生活様式も最も整うて品位を齎さずとて輕視し、殊に人生を対象とした文學を卑俗なものとして、侮蔑する

偏見を有したので、彼等の階級は大に文學の發展を妨げられ、又その範圍を狭く局限されてゐた。即ち彼等の選んだ文學の種類は漢詩文、和歌、擬古小品文學等であつたが、漢詩文は外國文學の模範の域を脱することを得ず、和歌は既に時代を代表するに足らないものと成り、小品文學は古語の東洋や、外國文章樣式の模倣などの爲めに、匠匠人の文學になり切らず、品位を誇つた武士文學も實質に於て甚だ不満足なものとなつてゐる。町人文學は流石に新興階級の中から自然に起つたものだけに自由と活氣に充ちて、その形態も種類も多様であり、その數量に於ても前代未聞であり、品位に缺いた所はあるにしても、時風として盛觀を呈してゐる。浮世草子、浄瑠璃、歌舞伎、讀本、酒本、黄表紙、合巻、人情本、狂歌、川柳、各類型等すべてこれである。

文學精神

【文學精神】(一) 義理 義理は江戸時代生活の社會常識であり、社會規範であり、社會正義であり、社會道徳である。故に人々の一切の行爲は、この義理に最高の標準が示されてゐた。従つて義理は甚大な權威を以て時代の生活を支配してゐた。等しく義理といはれてゐたが、階級社會であつたから、武士と町人との間には、その内容を異にするものがあつた。例へば武士の義理では忠義を第一としたが、これは武士階級が主従間の結合を以て成立の基礎としてゐたので、多数武士のその主に対する忠義が最も重んぜられてゐた。町人には主従關係はなく、各個人、各家が獨立してゐたから、個人や家の利益幸福を目標として生きに必要なる義理が成立し尊重されてゐた。かくして江戸時代文學は、この義理の精神の表現、高揚、鼓吹の外に出でたものは高くない。

こゝに掲げた京傳、蘭世老人、馬琴著作集、三馬・一九の肖像は、木村 黙老自筆の稿本「戯作者考補遺」中に存する五波亭國貞筆の下繪から、今度初めて木版に附したものである。

像 肖 翁 作 著



像 人 老 世 醒



十 遍 舍 一 九



式 亭 三 馬



此 畫 乃 本 畫 師 所 畫 之 畫 也 其 畫 師 之 名 曰 三 馬 式 亭 也 其 畫 師 之 名 曰 三 馬 式 亭 也 其 畫 師 之 名 曰 三 馬 式 亭 也

(二) 人情 若し義理の精神のみが強くなれば、人々の生活は、その拘束の大きな力に壓倒せられて、個性を失ひ、人々の特殊な知能の光も失はれてしまふこととならう。さうして卑屈な、調ひと暖みとの缺けた生活とならう。然るに江戸時代生活には、義理の外に人情に生きる精神があつて、この弊に陥ることを救つてゐた。義理は階級的に特殊な性質を有つてゐたが、人情は普遍的で、人を平等にするものである。又義理のきこちなさは、人情の油に和らげられ、人情は又義理に調節されて、兩者相助け相制したから、社会は平和秩序を保ち、生活は暖み調ひを有つことを得たのである。江戸時代文学には、この義理と人情とを、各別に主題としたものもあるが、その多くは二者を一括に取扱つて、その葛藤衝突の間に、或は義理の精神の立派さ、健けさを表はし、或は人情の美しさ、深さを描出してゐる。(三) 因果報 因果報は、自然界に於ては當然たる一大法則であるが、人生に於ては、亦一の法則たることを肯定し得る。江戸時代に於ては小乗佛教が弘布したと共に、この思想が廣く世に行はれてゐたので、文學も宗教的教訓的傾向を帯ぶると共に、この思想をば、その教訓の基礎としてゐるものが少なくない。而してこの傾向は上方文學よりも江戸文學に多く、江戸文學中でも、讀本及びその派生引くものに著しいが、笑を主とした滑稽本、類談生活を取扱つた人情本にすらこれを

見せる事が少なくない。(四) 判官忠臣 歌舞伎、浮世草子、小説の特色の根柢を成す精神に、判官忠臣がある。判官忠臣は非凡人に對する崇拜尊敬と、不適環境に在るものに對する同情同情との合したもので、その同情は強力であつて、惡なる仇敵が非凡人を苦しめる場合に際するものであるから、作者は武士町人の正義道徳を具體化した英雄偉人を主人公とし、多くこれを不適環境に置いて、終に至つて初めてこれを救ひ、又強力なる惡の敵役なる人物を設けてゐる。斯かる特色上の傾向は、作者が判官忠臣の特色の根柢に置いてゐる爲めに生じたもので、又讀者のこの精神に訴へた爲めに生じたものでもある。(五) 官軍崇拜 階級制度に由つて町人の世界が狭く局限され、その活動も商工業の範圍を出づることを許されてゐなかつたので、彼等の事功慾や名譽慾等は唯その分を守つて、物質上に成功すること、換言すれば大富を得て世にその名を轟かせることに限られてゐた。随つて彼等は富に對して強い憧憬を有することとなつてゐた。近畿地方の百姓の次男三男の觀が少時農村を出て京阪の商家に奉公し、長じて一個獨立の商人となり、遂に巨萬の富を蓄積した觀の實例と、富者の社會に於ける權勢の盛大である實例とは、個々この精神を世人に鼓吹した。かくして元禄文學中に、この精神を取扱つた町人物(通稱)と稱せられるものを見るに至つた。町人物は上方文學中にも見出されるが、この精神は江戸文學中にも隨所に見出される。(六) 現實享樂 官軍崇拜の精神と、現實生活を享樂せんとする精神とは、多くの時代、多くの人に於て共存し、表裏をなすものである。江戸時代の町人階級に於ては、一生を大富の獲得に甘んずることは出来なかつた。彼等は得る一面に於て得たる富を以て、自己の現實生活を豊かにし、享樂することに人生の價値を見出してゐた。國家意識、社會意識の微弱であつた町人、活動の世界を狭く限られて

ゐた町人としては、この低級の生活も已むを得ないことであつた。上方・江戸の文學を通じてこの精神は頗る著しい。(七) 好色と性 現實享樂精神の最も著しい現れは、好色方面である。その理想であつた精神である。これは元禄文學中の浮世草子、好色本、御城物語(各書名を省略)を中心として、歌舞伎、浄瑠璃等に擴がつた精神である。當時の好色生活は純粹性慾生活ではなく、これに社會的遊戯生活の加はつたものである。而して性慾の束縛を多く受ける所なく、社會的情趣を最も多量に享樂し得るを性とし、これを好色生活の理想とした。この精神は蓋し上方文學の精神として最も著しいものである。(八) 通 上方文學の精神は、江戸文學に至つて通と變つた。併し江戸の通は、好色の世界から一般の世界に及んで廣くなつたものである。遊里の遊びが通の精神に支配されたのは勿論、一般の社交生活に於ても、通は大勢力を有つてゐた。上方の通にも諸分を知るといふことは、重要素となつてゐたのであるが、江戸の通は、一層知的通を重んじたものである。即ち江戸生活のものを知り、體得することが、主要な通人の資格であつた。而して江戸生活は、體面的趣味の生活であつたから、通は要するに、江戸趣味の通曉を得た外ならぬのであつた。この通の精神は、あらゆる江戸文學に共通したものであるから、江戸文學は通の文學とも稱せられてゐる。(九) 滑稽 滑稽は學者に依つて色々に説明され、又種々に分類されてゐる。江戸時代の滑稽には、言語の遊戯がある。あらゆるもの滑稽、茶化しがある。即ち都市人の標準を以て地方人を笑つた滑稽、通人の

眼を以て半可通、非通を笑つた滑稽がある。言語の遊戯には酒落があり、伊左衛門があり、地口がある。これ等は、狂歌、川柳、滑稽、黄表紙、滑稽本、其ほか多く、滑稽、茶化しの滑稽は、穿ち、皮肉、諷刺を伴ふものが多く、これ等は川柳、滑稽本、黄表紙、滑稽本等に準じて通の精神の反面と見ることが出来る。隨つて通全盛の江戸に、この種の滑稽を盛つた文學の出現は頗る自然である。(一〇) エロチック この精神も亦江戸時代文學には、全時期を通じての種々に互るものである。元禄以前のものには少いが、絶無ではない。上方文學に至つては遂に多くなつてゐる。遊女評判記や西鶴の好色本など、この風潮を促したことに與つて力があつたであらうが、西鶴のそれの如きは、必然的に避け難いもので、無用にとこの精神を表したのも多い。かういふ類は、執着的な理想に憧憬せしめるものも多いが、江戸文學中のそれは、實感の刺戟を旨とするやうになつてゐる。(一一) 變奇 怪談奇談を標榜するもの外に、神佛の化現、幽霊、生靈、狐の怪、草木の怪、その他怪異を含むものが多い。これ等は何れも變奇趣味を表したものと云へないが、その多くは、この趣味の上に立つものである。諸國唯命平浄瑠璃を頭項から、讀本等に最も著しい。怪異を取扱つた文學の中、神佛的なものも是れ少く、「御月物語」その他五指を屈するにも足らない位であつて、多くは唯變奇な興味を満足させるものである。黄表紙類の滑稽文學の中に、見える怪異は、大抵滑稽化されてゐるので、これ等の變奇趣味は又自ら怪談奇談(變奇)

淮南子

淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者...

淮南子

淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者...

淮南子

淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者...

淮南子

淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者 淮南子 著者...

一戀の付句

一戀の付句 巻之十二神祇の付句 巻之十三釋教・真傳・法儀・無常の付句...

一戀の付句

一戀の付句 巻之十二神祇の付句 巻之十三釋教・真傳・法儀・無常の付句...

一戀の付句

一戀の付句 巻之十二神祇の付句 巻之十三釋教・真傳・法儀・無常の付句...

一戀の付句

一戀の付句 巻之十二神祇の付句 巻之十三釋教・真傳・法儀・無常の付句...

江之島土産

江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者...

江之島土産

江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者...

江之島土産

江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者...

江之島土産

江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者 江之島土産 著者...

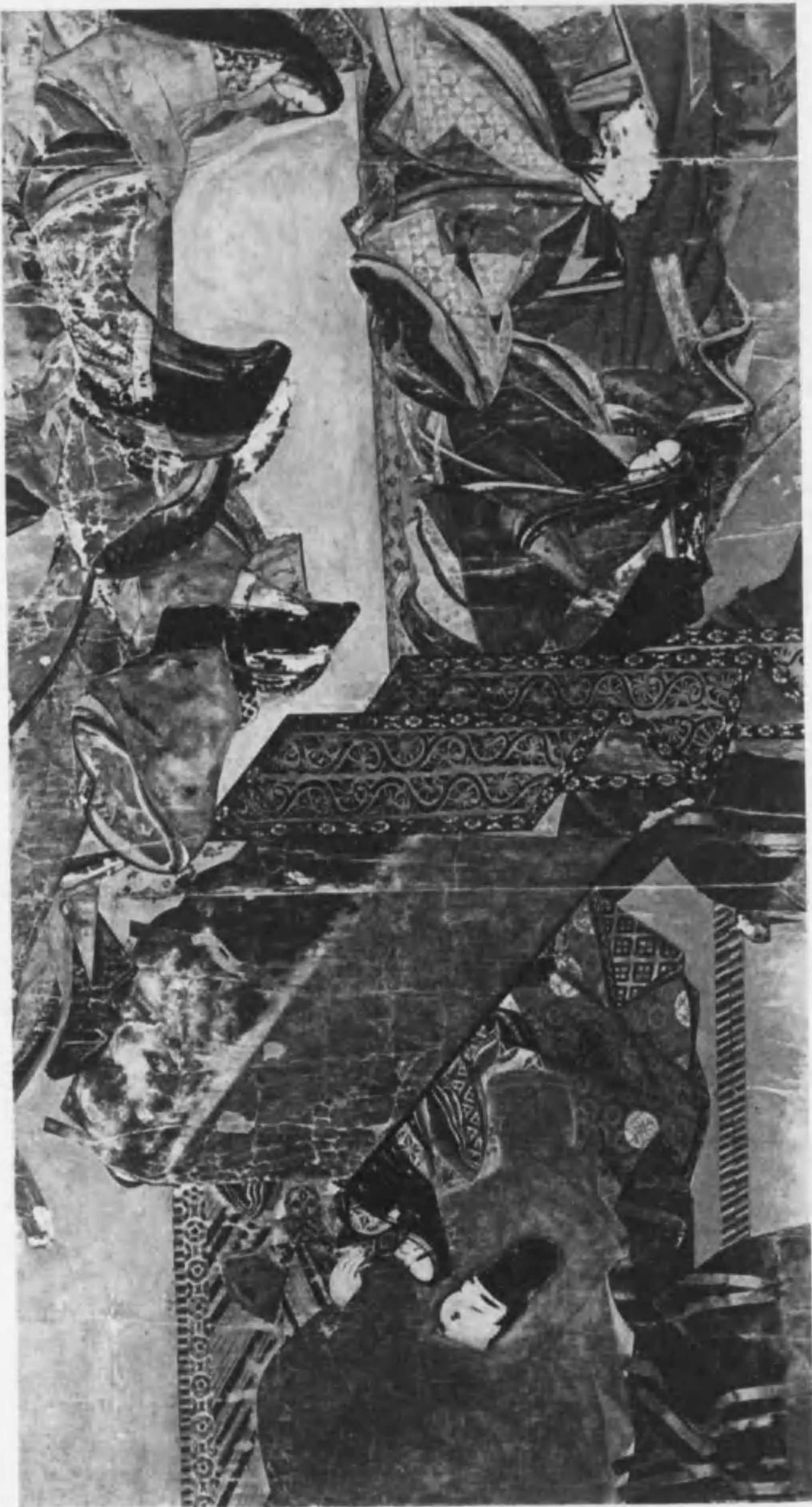
大に仇したので、領主宗頼八郎宗重は朝廷に訴へて賞錢を借り、その威力で暫く餘程に歸したが、崇徳帝の時再び大害あり、朝廷は三浦介義純・上總介廣常及び泰親を都頭野に遣はしこれを討つた。然るに妖狐は毒石に變じて、なほ人畜に害を及ぼすので、多くの名僧佛法を以て教化せんとし、却つて毒に富んで死ねたが、後深草院の時、播磨法華寺の玄翁和尚は遂にこれを成佛せしめた。

【佛想】帝王にして龍宮に溺れ、爲めに朝政大に衰へて國を亂した例は、古今東西に数多いが、作者はこゝに料王と和紀、斑足太子と聖陽夫人、爾王と義朝、鳥羽帝と玉藻前の四例を持ち来り、これを一個の白面金毛九尾の狐の變化なりとし、その毒を散播させて轉生の跡を明かにし、最後に殺生石教化を以て、空駕の大團圓としてゐる。事件そのものが正史或は傳説の上に於て、既に十分曲折に富み、多くの潤色を加へずして興味豊かな題材である。作者は殊更に私見を加へず、平敘的に描寫して、讀物としての面白さを備へさせた。只四つの話はそれぞれ類型のものになつてゐるが、もと三國轉生のおと見ようとする不自然な構想によつて生じたものである。序に三國の美女の害を説いて、大に色を戒むる爲めに執筆したものであると言つてゐる。又作者の學識は、青島と聖陽夫人との對論、漢の歌人論、青島大臣の唐土に於て難題に遭ふ條、泰親新編の描寫等に見られる。那裏は豐富で、それ／＼三國の風俗を書き分けようとした苦心の跡が窺はれる。【註】

軒【初編】寛政十一年七月十二日より豊後守【題材】「眞書大日記」「繪本大日記」等に依つて通俗化された秀吉一代記中から、信長の一向宗討伐と光秀叛逆と秀吉の高松攻めとに取材したものである。【梗概】安土城に於ける尾田春長は、曾て城中に移殖した泉州妙國寺の僧徒が夜々怪異を現すので、阿部法印を召して占はせる。武智光秀は、豊後守地を讓し佛弟子を辱しめ、主君の惡逆を直諫するが、却つて打擲される。六月朔日の段、春長上洛、二條城に於ける勅使慶應の段、信長は光秀と義朝九であるが、後で光秀の二心を疑ふ春長は、龍丸と争ふ光秀を敵々に侮辱する。光秀の上屋敷へ上使來つて、後醍醐の命を傳へるので、遂に叛逆の意を固める。【同日の段】春長の本能寺へ阿野の局は三法師君を作つて參向する。光秀の軍勢夜討をかけ、龍丸等は奮戦するが衆寡敵せず、春長も自刃する。阿野の局は若君とお家の旗を揮つて逃れる。【同日の段】高松城の城主清水長左衛門宗治の妹玉露の許すたが、許し無き仇討故に自殺を許す所を宗治に止められ、敵陣に逃れて城内と内應すべき命を受け、加藤清正の陣に到り久吉の許に伴はれる。【同日の段】玉露と安徳寺の僧惠理とは宗治の密使として、小梅川陸軍を助け、和議の計略を勧められ、高松の陣に赴く事となる。【同日の段】久吉の情ある計ひで山三郎は清水宗治への裏書を託され、玉露と共に歸される。本能寺を逃れた阿野の局が駆けつけ、主君の凶事を告げて見聞する。これを窺ひ聞いて歸らうとする惠理を久吉は

呼び止め、普矢刺傷で我が將來を豫言した僧と見破り、これに説いて和議を調へしめる。宗治來り城中の人命の爲め自刃する。小梅川も入り來り和睦成る。【同日の段】妙心寺に光秀は營を構へてゐる。母原月是我子の叛逆を恥ぢ憤り獨り去つて行く。光秀佛儒し自

子十次郎は、豊後守の侍と闘ひ、愈々出陣の志を固める。【同日の段】武智方の勇將四王天但馬守は、百姓に身をやつし大物頭で久吉に近寄るが、見破られ斬死する。久吉は逃れる。【同日の段】尾ヶ崎に閑居する老母草月の許へ光秀の妻は、嫁初菊を伴つて見舞に來る。十次郎も出陣の許を得ん爲め訪れ、初菊と親言して出陣する。四王天に追はれた久吉は無形となつて宿を求め、光秀は跡を追つて忍び來り闘つて竹槍で母を刺す。十次郎も深傷を負つて歸る。久吉と光秀は勝負を天正山に決せんと別れる。【同日の段】松田政道の妻は、夫の命を受け、光秀の息普濟丸を守り、屍の許に急ぐ。途に敵兵に遭ふが切抜ける。【同日の段】討死を覺悟の政道は妻の兄倉尾茂助と闘ひ、後事を託して自刃する。政道の父松田宗左衛門は、普濟丸の首を打つて久吉の賞檢に供へる。久吉はそれが政道の一子の首級である事を察知してゐる。宗左衛門は君を欺いた詫びにと自殺せんとするが久吉に止められ、千の利休と號し茶の道に餘命を捧げる事となる。【同日の段】筒井順慶の裏切りで戦ひ敗れた光秀は、單騎逃れる途中、小栗橋の土民のために傷つき自殺する。久吉追ひ來つて首級をあげる。【佛想】六月一日から十三日まで十三冊に分ち、それに發端を添へてゐる。發端部分で本曲の主要な構成部分たる一向宗討伐と光秀謀叛との伏線が張られるが、前者は七冊



「繪本大日記」の一場面

繪本大日記 十三段

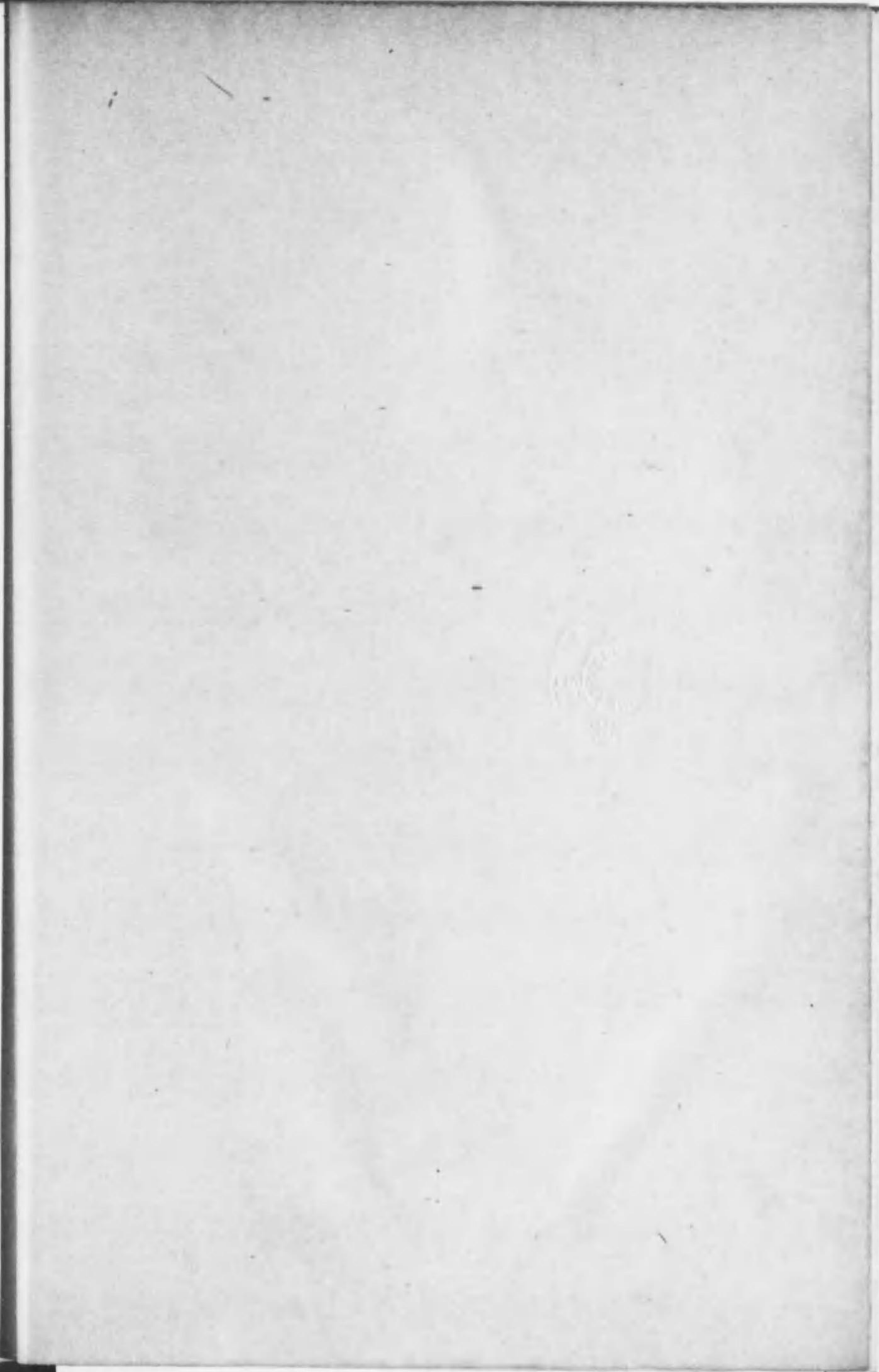
繪本大日記 序



《蘇州忠孝堂》詞繪雲鶴大伴



《蘇州子孫廟山景圖》卷繪起筆山景印



目移の義の段に、後者は一・二・六冊目を經て十冊目迄の段に、それ／＼發展する。而して本曲を五段物に還元すれば、移の義の切は所謂二の切、尼ヶ崎の切は三の切に相當し、四の切に當る十二冊目の利休屋敷と共に全曲中の見せ場である。併しこの十二冊目は、所謂四の口の道行に當る十一冊目と共に、全體の筋の上から見れば、一挿話とも言ふべき性質のものであり、且つ恐らくは全十三冊は長きに過ぎる爲め、再編以後は多くこの二冊は省かれたる場合は尼ヶ崎が四の切、移の義が三の切、五冊目久吉陣屋が二の切といふ取扱ひを受ける事になる。高松政め、一向討伐、光秀叛逆といふ三つの題材のそれ／＼のキ、タストロフを成すこの三段は、後々まで演ぜられた。又光秀中心に見て一冊目の二條城配膳と上屋敷二冊日本能寺、六冊目妙心寺が尼ヶ崎と共に今日なほ屋々上演される。二冊目下郎の詞に「ほんにやれ／＼來芝の事は由男にして、山村ほど今をため、里虹ものぢやといはるる市紅が肝心だ」と言はせてゐる程、歌舞伎は全盛で採りは衰運に赴かうとする時期の作だけに、實験場までの諸作に比し、構想・趣向人物、さては文章に至る迄道力、薄い散漫な感じを興へるのは止むを得ない。

【影響】「繪本大日記」は又「繪本大日記」といふ外題でも屋々上演されたが、初演以後は多くは十冊目もしくは七冊目迄であつた。今日文學座では、前述の光秀中心の演出法を取る。歌舞伎への移入は寛政十二年十一月大阪角芝居中山徳二郎座の「源方大日記」遺馬十郎の巻が初めであらう。今日では尼ヶ崎のみが中幕物の原巻として残り、純歌舞伎風の馬場の光秀と共に、光秀物の變遷となつてゐる。大正期に入つて以後の光秀物に右田實彦作「大日記婦女文章」(大正四年九月帝國劇場)がある。馬場と近松の「本朝三國志」との組合せである。

【参考】浮城瑞名作集(日本名著全集)下巻解説。繪本通俗異聞集(講談社)。「通俗異聞集」を見よ。

繪本通俗三國志(講談社)。「通俗三國志」を見よ。

繪本身延山利生記(講談社)。「甲州身延山利生記」を見よ。

【形式】蓋しこの綜合の物となるものは、繪物形式であるが、その綜合を達成せしむる主要素は、まづ第一に詞書と繪との交互關係の成立であり、第二には大和繪に於ける時間表現の特質であらう。第一は詞書と繪とを交互に配列して、筋の發展を運ぶ道り方が普通であつて、その際、詞書は繪の説明として從的立場をとり、時には詞中に詞を挿入して話を運ぶ場合もあるが、また文字も一の藝術としてその書體の美と繪畫との形式的調和をも尊重してゐるのである。第二は物語の内容を繪畫化する際の描法に於ける問題である。即ち第一の如く物語の發展に對して詞書と繪との關係に依る外的解決以上に、更に繪畫自身に内在する發展的描法による實質的の解決である。これを大別すれば、點描寫と活動描寫との二に要約し得る。屋敷を取除き鳥籠園の内に幾部屋をも覗く所謂屋敷法(如く)の如く、或は同じ場面に同じ人物を幾度も繰返して、或は時間的變遷を現はすが如きは前者の一例であり、これに屬して個々の人物をその活動の動態に於て描き、動作表現を如實な

用ひられた一般形式で、描きひろげつゝこれを見て行くところにこの形式の特質がある。繪畫に於てこの形式を必要とするに至つた事情は、平安朝以來物語の類が發達して、これを繪畫に表現せんとする要求が起つたためと見ることが出来る。何故なれば、物語は時間上の發展を主要な條件とするので、これを繪畫に表現せんとすれば、疊々推許の形式を借る最も合理的とせねばなるまい。かくして繪畫と物語とが結合したのであつて、この意味に於て、繪畫は文學と繪畫との綜合藝術と言ふことが出来る。

【形式】蓋しこの綜合の物となるものは、繪物形式であるが、その綜合を達成せしむる主要素は、まづ第一に詞書と繪との交互關係の成立であり、第二には大和繪に於ける時間表現の特質であらう。第一は詞書と繪とを交互に配列して、筋の發展を運ぶ道り方が普通であつて、その際、詞書は繪の説明として從的立場をとり、時には詞中に詞を挿入して話を運ぶ場合もあるが、また文字も一の藝術としてその書體の美と繪畫との形式的調和をも尊重してゐるのである。第二は物語の内容を繪畫化する際の描法に於ける問題である。即ち第一の如く物語の發展に對して詞書と繪との關係に依る外的解決以上に、更に繪畫自身に内在する發展的描法による實質的の解決である。これを大別すれば、點描寫と活動描寫との二に要約し得る。屋敷を取除き鳥籠園の内に幾部屋をも覗く所謂屋敷法(如く)の如く、或は同じ場面に同じ人物を幾度も繰返して、或は時間的變遷を現はすが如きは前者の一例であり、これに屬して個々の人物をその活動の動態に於て描き、動作表現を如實な

らしむるが如きは後者の一例である。而して兩者とも構圖に併せて筆墨の緩急遲速等が重要な要素となるのである。

【描寫様式】繪畫表現の性質から大體すれば、繪畫本位の靜かな畫致のもの、發展本位の活動的な畫致のものとを區別することが出来る。これは一面題材によつて規定されるのであつて、繪畫本位のものは主として平安朝以來の優美な貴族趣味に託し、所謂つくり繪の濃厚な色彩主義を以てかきおこし、細い輪廓線を用ひてゐるが、發展本位のものは佛敎の平民化に伴ふ所多く、信仰普及の方便としてその趣味も寧ろ平民的であり、描寫は色彩を主とせず、専ら活動的な筆墨主義に傾く。而して前者は屋内の場面が主となるので、多く筆技屋敷法を用ひ、人物は引目鉤鼻式でやさしい顔を現はすが多いが、後者は屋外で活動する場面が多く、山水描寫も多からず、人物の姿態も活潑で表情が激しい。勿論この二流は繪畫の中に要素として混在してゐるが、然區別し得ない場合も多いが、概して云へば、前者は藤原時代に成立した繪畫様式で、やがて以後の大和繪の本流となるものであるが、後者はその末期から鎌倉の初期にかけて佛敎關係の裡から發達したもので、當時最高潮として、以後は前者の中に攝取された形が存在するのである。而して繪畫製作の數から言へば、鎌倉中期より末期にかけて、その隆盛の頂點に達してゐるが、藝術的價値の観点よりすれば、藤原本より鎌倉初めにかけての没落の時代思潮の中から生れた繪畫に、繪畫固有の描寫特質を發揮して、優れた表現を達成してゐるものが最も多い。

江馬修(江馬修) 小説家(生年)明治二十

である。次に清阿に就いては、賀茂別冊社所蔵本「室曲撰要」、水戸徳助所蔵本等の文...

○室曲に關する二三の考察 著者 齋藤 孝 著 齋藤 孝 著 齋藤 孝 著 齋藤 孝 著...

舞ひ、舞はるは身甲を冠り、袂衣を着けて居る。『沿革』「樂隊録」には、延喜八年に左近衛權...

ある。古語には何人であるか未詳。『成立』永仁年間「諸本」群書類從二九三所載『祖職・...

演劇は文學の範圍に屬すると同時に、更に藝術の一部分である。『性質』(一)文學としての演劇。抒情文學、敘事文學と對立し、劇文學乃至詩と呼ばれる。

聯絡を密接に保ちながら、人間生活が複雑となるに従つて、即ち人間の意志が動作よりも言語によつて表現されるものが多くなり従つて、動作は内的に隠蔽せられ、その代り言語が外的に廣く役割を勤めつゝ進んで来たのが演劇である。併し演劇藝術の内的生命は、必ず動的表現への努力を怠るべからぬ。

『沿革』(一)古代劇(希臘劇) 西洋演劇の源流は希臘に發する。大凡紀元前第五世紀から同第三世紀に亘つて、雅典國家の保護の下に演劇が隆盛となり、悲劇(tragedy)、喜劇(komodia)及び二種特殊なる形式的サチロス劇を作り出した。これ等は皆希臘のサチロスに思徒する神話中の半神半人のサチロスなるものに扮し、唱ひ且つ踊り、サチロスは對話と身振り動作によつて、ディオニソスに關する經歷を演じた所作に出てゐる。元來 tragedy は山羊の歌の意で、必ずしも悲しいといふ意味はなかつた。ただディオラムボスは嚴肅莊嚴で悲劇を導びてゐた所から、その傾向のものが悲劇と呼ばれた。この悲劇が發達するに従つて、内容にディオニソスの關係以外に、他の神話神話中の人物が取り入れられるやうになつた。而して主人公は何者であつても、合唱團は必ずサチロスから成り立つてゐるものが、所謂サチロス劇である。喜劇の起源は、葡萄の收穫後、百姓等が美酒を恵んだ神ディオニソスを祭る祝宴を聞き、醉舞に乘じて行列を組んで踊り歩き、平素不平不満を持つてゐる人や事情に對して諷刺嘲罵を向ける歌を唱つたことに發してゐる。即ち komodia は行列の歌の意である。故に初期の喜劇即ち舊喜劇(Komodia archaika)にはこの傾向が著しかったが、國情の變化と共に中期喜劇(Komodia mesoi)を経て、近世喜

來たに過ぎない。獨逸語では悲劇を Tragedie、(悲劇) (希臘) 喜劇を Tragedie (喜劇) (希臘) とも呼び、喜劇は豫言の schismata (豫言) として、總て眼に見る演技を意味するを以て當てられて居る。英佛ではこれを drama, drama, drama 又は serious drama, dramatic schick と呼ぶ。(二)更に演劇その作者が特別な意圖を加へた爲めに生じた特色によつて、色々な名稱を以て分類することもある。例へば、劇的事件の展開が、主として人物の性格に基づくやうに作られてゐるものを性格劇(Charakterdrama)、性格よりも周圍の事情から劇的紛糾の生ずるものを環境劇(Milieu drama)、この事情が寧ろ超人爲の力となつてゐるものを運命劇(Schicksalsdrama)、作者の抱懐する世界觀人生觀などが演劇的形式を借りて具體化されてゐるやうなものに理論劇(Theoretisches)、それよりも小規模に於いて、作者が何等かの人生問題をそれによつて提供せんとするやうなものを問題劇(Problematische Theatrdrama)、或は作者の主義主張を具體的に内容としてゐる如き相對的な稱呼として、歴史劇(Historisches Drama)に對しては、現代劇(Zeitdrama)がある。王侯貴人を主人公とする宮廷劇(Teildrama)、武士附敵、殊に野武士を登場人物とする武士劇(Kriegerdrama)、町人階級の世界に於ける喜劇を描出した町人劇(Bürgerliches Drama)等もある。宗教劇(Gestisches Drama)、世俗劇(Weltliches Drama)の區別がある。(四)時代の分類すると、希臘羅馬の古代劇(Antikes Drama)、第十六世紀以後の近世劇(Neues Drama)、轉近の近代劇(Mo-

を用いた問答もして、それを開口猿樂(猿唄)といひ、略しては開口ともいつた。これ等は...



(華信元佐士)舞年延寺福舞

専門の僧が二人、鳥帽子・高頭・重衣・表袴・色小袖...

聖とあるから、縁輪女が踊つたに相違ない。あしらは小鼓。この所作の前後にも歌があつて、舞僧がわくを待出す時には「舞をよるよ手もすまにすまに、くるくるとサウヨノ」...

昔のむすまで、千代に八千代にさざれ石のいははとなりて昔のむすまで」の歌を詠つた。次々に出る遊僧は皆別な短歌を詠ふ。「風流」...

- 一、延年次第 舞(四調)調子笙笛 横山殿
二、香合舞 本覺院之 音頭興天大寺 助
三、香合舞 本覺院之 音頭興天大寺 助
四、香合舞 本覺院之 音頭興天大寺 助

玉一殿 慶海 正俊 良海 陸奥兼性坊
十四番風流人数 少人十人 若後十三人 已上二十三人
一、延年次第 舞(四調)調子笙笛 横山殿

之部 ○歌舞音曲考説高野之 ○日本歌謡史
上の
役の行者 大正五年九月「女魔術」として坪内逍遙(逍遙)大正五年九月「女魔術」として...

〔以上古蹟〕○寶篋山代紙(明治九年六月新編)二
代河竹新七、後の醍醐朝(等)代紙(三)

織鏡(明治二年四月)中村康、三代藤川如華(○宇都
宮紅葉(明治八年一月)守田周、二代河竹新七)

關して北國に戦死した後は、その弟行尹に就
いて學ばれたが、當時の世尊寺流は筆力衰へ、

して、明治維新後は漸く衰頹するに至つた。
〔流祖小傳〕藤原親王は伏見天皇第六の皇子、

全集(俳諧文集)芭蕉文集第十一編、在門俳諧
全集(俳諧文集)所収(内容)元禄八年七月

代集、芭蕉全集(俳諧文集)沼波遺書芭蕉全集
集、芭蕉一代集(俳諧文集)改定文集等所収

行一册(俳諧文集)藤原氏芭蕉集所収(○次
行兵衛物語二册)向井野町(○目上)

老のすなみ(俳諧文集)芭蕉集(著者)宗
老のすなみ(俳諧文集)芭蕉集(著者)宗

主膳大夫の浮瑠璃。保野五郎景久は紅梅の花を、河津三郎祐安は白梅の花を石として、若...



(演物) 附 本 種 鳥 小 短 劇 大

へ賜はつた大杯なので、頼朝が軍兵の企て明白になり、兩人は行つて源氏を討たんとする...

を罪に陥すべき手段を講じ、百姓平太の家を知らず、味方として頼朝等をして、己れ日本國を掌握せんとす...

深ききかせてとむ。清左衛門は幸右衛門に軍兵を動かす。長田の鶴鶴で家主彌次兵衛は清...

の自序がある。(前田)

奥羽四天王 奥羽四天王(奥羽後三年記)を、奥羽四天王(奥羽後三年記)を、奥羽四天王(奥羽後三年記)を...

【五明】本名兄之、字了阿、幼名庄九郎、別號小夜庵、機嫌會一方庵、丁阿亭、典二房、鶴頭聖、...

なつたが、間もなくこれを同じ八弟子の一人葛三に譲つて江戸を去り、武藏の本庄に小菟庵を結んで居た。同じ八弟子の一人道彦(弟)...

める事としたのである(續日本紀)桓武天皇元平十一月には雅樂寮が興及び大歌を奏して...

(曲記による名) 片歌、歌謡、お良歌、上(歌) 片下(片下) 志那歌、宇歌、歌謡、(歌者による名) 神歌、天歌、久米歌、國...

評した。この時田圃の伊平は喜八の冤罪を聞いて自首し、越前守取調への結果それ／＼處断し、喜八は青天白日の身となり、羽主吉左衛門より資本を興へられて家を興した。

依つて着落した。〔第三編・第四編〕千葉氏風の区田種平人に、五三興丸の二人の子があつた。三興丸は、種平の相があるとして出家したが、鎌倉の小間物屋伊豆屋喜兵衛に請はれ、名を興三郎と改め、その養子となつた。

は下獄したが、又脱獄して赤間源左衛門に頼つたことを木更津に漂着した久次の知るところとなり、互興三郎と縁を絶つて仇を報じた。こゝにお富も来て興三郎に縁を立てて自書し、興三郎の罪は許され、互は百五十貫を増された。

は清い美しい我が君太郎が、もう手の届かない世界へ去ることを惜らねばならなかつた。その寂しさから、つとめて福井さんに近づいて、賑やかな酒席へ出入りしてゐるうち、福井さんの内縁の妻の多さんの妹で男縁ひで通してゐる一流の藝者小さとを知つた。

懸へと、個ましい彷彿を續ける姿を寫すと共に、明治末期新演劇全盛時代の芳町を中心とした花柳界の風俗が鮮やかに展開されてゐる。而も大川の水の匂ひにも似た抒情味が、作者の愛情の筆に依つて篇中に漂ひ、美しい詩情を感じさせずには置かぬ名作である。〔木津〕

後継家に「和歌問答」と題する「奥義抄」の鎌倉時代寫本の零本(著者刊本の第八巻に書、初めに墨上書)の最善の写本がある。又内閣文庫に二本、うち一本は中巻の途中迄以下を缺き、今一本は刊本第八巻に相當する問答の部を缺くが、刊本と比較するに出入の箇所が



多い。問答には中巻の寫本を以てする。〔組織・内容〕巻頭に序文あり、和歌の意義・種類・沿革・效用・歌謡詩・歌集等の事をいふ。本文は上中下の三巻に分つ。上巻(和歌第一、二、三)は式であつて、六義・六體・三種體・八品

【作者】近松門左衛門と推定されてゐる。「成立」未詳。藤井乙男氏は、頼政の五百年忌は天和元年に當るから、或はその時の起稿かと書はれたが、藤原貞家末代元禄初年頃と見たい文致や趣向である。〔諸本〕宇治加賀屋の正本に八行六十二本あり、又入船細字本もある。竹本筑後屋の奥附の又「源三郎頼政」と題する十行三十二本、内容は同一である。近松全集第二巻「近松門左衛門全集第十巻」所載【資料】源三郎頼政が仁王を奉じて兵を擧げたが、軍成らずして宇治の平等院へ遁る事、高曲「頼政」を中心として撰び、これに對する部將田原又太郎忠綱と、頼政の二女頼政、能田、郎等早太等の活動を取合せである。

